

アトラスIV

泥人形―

ディエス・イレ

正道

目次

第6章 泥人形

(1)	雨下	3
(2)	青空の中で	11
(3)	民の苦痛、巫女の苦悩	20
(4)	再現	26
(5)	魔術の必然	35

第7章 ディエス・イレ(怒りの日)

(1)	滅亡の序幕	43
(2)	巫女の不在	53
(3)	昨夜、嵐の夜のこと	59
(4)	朝の静寂	68
(5)	転がる円柱	74

第6章 泥人形

(1) 雨下

途切れない雨が降り始めてから、かれこれ三週間にもなります。

テピト・テアナに長い雨季が訪れたからであり、ときおり雨足が弱まることはあるものの、だからといって、頭上に晴れ間がのぞくことなど、望むのさえ虚しいことでした。こと数日前からは、少しも切れ目がない、強い雨模様が続いています。

「あと二月は、この雨を覚悟しなくちゃならない」

こう言うのはマゴラー、かの変装異国人のイドでした。彼はこう、地声を周囲に聞かれないよう、ごく小さな声で呟いたのです。

A black and white illustration of a young person with light-colored hair tied in a bun, wearing a traditional-style tunic with lacing. They are standing in front of a wooden structure with a thatched roof, possibly a hut or a cave entrance. The person has a surprised or concerned expression, with their right hand raised near their face. The background shows a rocky or cave-like interior.



イドは、チェリアによる「掌上の垂訓」がなされたその日も、それ以後の日々も、以前と変わらず、ずっとデルフィー中毒者たちと共に風穴暮らしをしていました。

繰り返しになりますが、風穴とは、火山の下などに見られる地下空間のことです。その風穴にイドたちはずっと潜伏していた、そういうことです。

といっても、以前一緒に暮らしていた中毒者の中には、あの「掌上の垂訓」以来、巫女たちの勢力に寝返った者も大勢いたので、なりゆきとして、それまで住んでいた場所に留まることは出来ません。イドとしては、前の風穴の住み心地が気に入っていたので、これはなかなか痛い話でした。

「あの日、風穴の入り口で見張りをしていた奴らが、変な巨人を見つけちゃった。それを中の男どもに言いふらしやがったんで、もの珍しさ出て行った奴が三十人もいたっけ。

キンナラの婆さんは、それを止めるでもなかった。

ただ、急いで引越しをするんだと命じやがったんだ。そんなことしたら、巨人を見に行った奴らが帰って来られなくなるだろうに。

まったく何を考えてるか分からねえ婆さんだが、それで引越してきたこの風穴、ちょっと俺には狭苦しいんだよな」

このように言うイドが住んでいるのは、以前の住居よりもラノ・ラク山に近い、名もない小さな火山の地下にある風穴でした。

そして、この気の滅入らざるを得ない長雨の中にあっても、どうしたわけか、この風穴にばかりは、ほとんど異様とも思えるような熱気が溢れていました。

察しはつくでしょう。そうです、アトラスたちが来訪したことで島の状況は一変したというのに、魔女が支配しているこの穴ぐらでは、今なお天の底が接近していた当時と同じことが続けられていたのです。昼間から中毒者たちの奇声が聞こえ、夜になればなったで、その狂乱じみた賑わいは以前どおりの醜悪さを晒していました。まさに「魔女をかこむ悪鬼たちの夜宴」といった様子です。集まっている人数こそ減ったものの、それを度外視すれば何も変わったところはなく、あるのは以前そのままの猥雑さばかりでした。

今夜の騒ぎも同様ですが、それでも、よく見てみると一つだけ以前との違いが挙げられそうです。

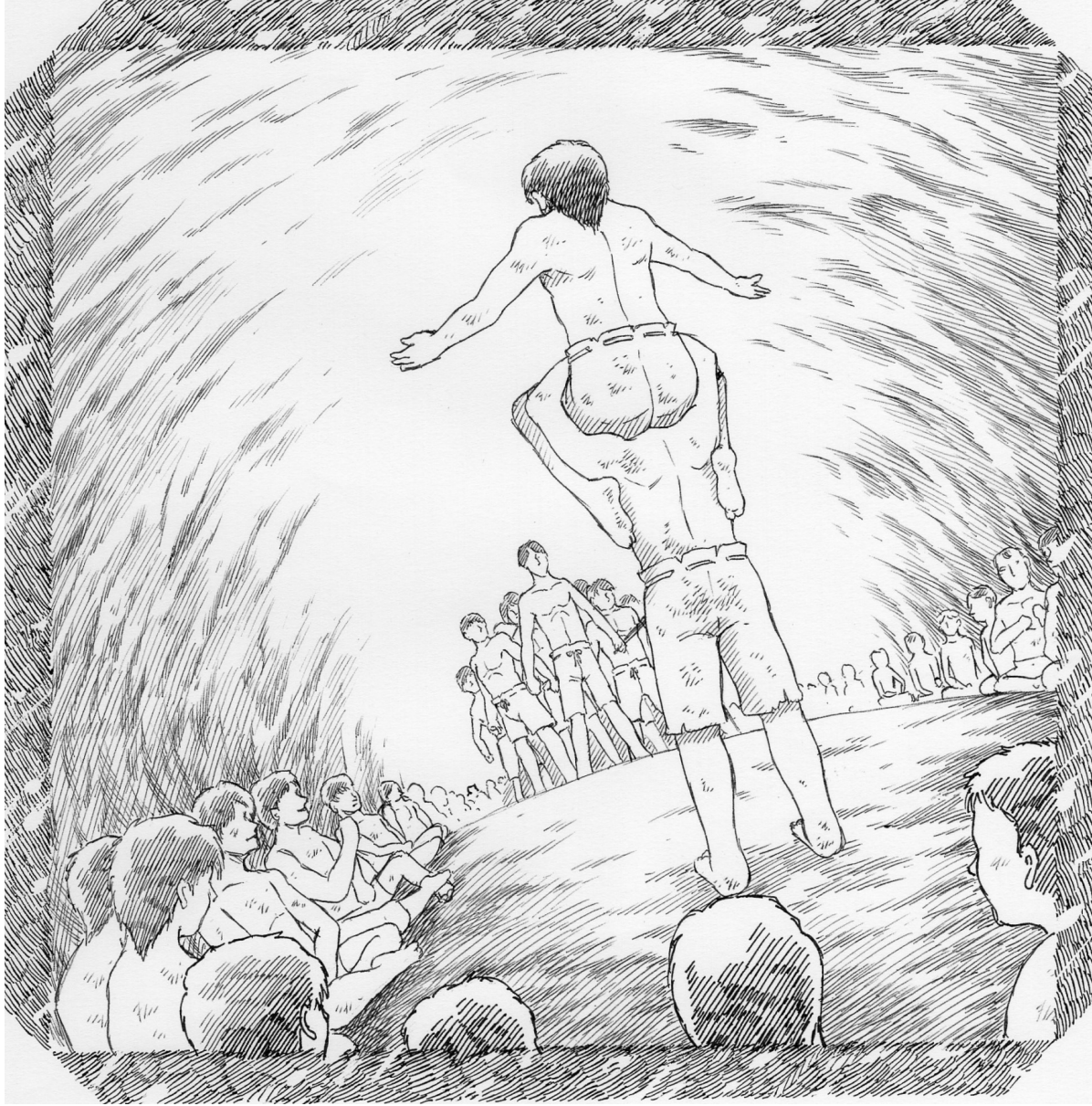
「白状します。私たちがここに来たのは、島の食べ物を食べつくすためでした」

かがり火によって照らされた風穴の中央。そこで肩車をして立っている上下二人の男のうち、上に乗っかっている方が卑屈にそう言います。すると、背後に何人もの徒党を引き連れた小男が、肩車の男たちに向かい、彼らに対して勇壮な声色で返しました。

「だが、そのような事は、お前たちの一存で出来ることではあるまい」

そう尋ねられた肩車の男は、あくまでも卑しげな姿勢を崩さずに答えます。

A black and white line drawing depicting a scene inside a cave. A man, seen from behind, stands on a large, rounded rock. He is shirtless and wears a loincloth. His arms are outstretched to the sides, and he appears to be addressing a group of people. The crowd, consisting of men and women, is seated on the ground, facing the man. The cave's interior is rendered with heavy, textured lines, suggesting a rough, rocky surface. The lighting is bright, coming from an opening at the far end of the cave, creating a strong contrast between the illuminated area and the shadows.



「はい、巫女と結託してやったことです。巫女は、いつの頃からか、この島の住人たちを疎ましく思うようになり、そのあげくに、島の人間すべてを滅ぼしてやろうと思いついたのです。」

僕は、それだったら、滅びていくまでの間に、島の食料を残らず平らげてしまおうと思って……勿体ないし、何分こういった巨体ですから、やはりお腹もすくんです」

「何とまあ、浅ましいことを」

「そして、食べ物を持ってくる代わりに、隠れて天の底を引っ張るといって、巫女が望んだとおりのことをしました。僕らにとっては何でもない事ですし、面白そうだったので、彼女の望みを拒んだりはしませんでした。島民たちの苦しむ顔も見なかったし、はい、実のところ、すべて筋書きどおりの芝居だったのです」

これを聞いて、肩車の二人組に相対した小男は、ギョロリと目を剥き、口上を叫ぶと一緒に、刀に見立てているらしい棒切れを横向きに振り払いました。

「巨人め、お前のようなウドの大木は、ここで朽ちて地虫の腹でも満たしてやるがいい。それが浅ましい空腹の怪物には相応しい末路であろう。さあ、我が手によって裁きを受けよ。神の使徒キンナラさまの名において、貴様を始末してくれるわ、えい！」

肩車が崩れることで、胴から真っ二つにされた巨人が表現されたらしく、瀕死のアトラスは、滑稽に悶えつつも、その息が果てるまえに遺言を残しました。

「ぐわ！ ……もっと食いたかった、のに、無念……」

そして、満足そうに笑った小男が、倒れた肩車の男たちを足下にして叫びます。

「悪魔は去った。さあ、皆のものの勝鬨を上げようぞ！」

すると、これで大団円らしく、それまで息をひそめていた徒党が一気に小男を囲み、彼を中心にして勝利の勝鬨を唱和しました。小男や徒党たち演技者の周りには、こうした芝居を眺める観客としての男たちが集まっていたましたが、その観客たちも、舞台と客席を分ける一線をこえて、この勝利の勝鬨に加わりました。

「われら悪魔の巨人に勝ちえたり！」

「勝利と正義は、我々にこそ与えられん！」

と、陶酔境から立ちのぼるこうした声が、沸き立ちながら風穴中を満たします。

デルフィー中毒者たちの前で上演され、こうして多大なる盛況をえた劇は、なんとキンナラの脚本による演し物でした。しかも、このように催される演目は一本だけではなく、類似した内容の作品が何本も用意されていたのです。いずれも滑稽な勧善懲悪もので、話のなかには、かならず悪役としての巫女とアトラスが登場しました。

内容的には下らないと評して然るべきものですが、話の最後には、例外なしに快い勝利が用意されていますので、葉によって判然としなくなった頭で見るとなれば、それでも結構楽しめるものではあったでしょう。内容はなくとも、痛快さと単純ささえあれば万事よしといった具合です。

次の言葉は、キンナラが何かのおりにイドに語ったものです。

「こういう理由で、巫女や巨人たちが倒されるのか、そんなことはどうだっていいのさ。とにかく敵が倒される場面があればいい。それさえあれば奴らは満足できるんだから。その場面を作るためなら、どんなデタラメをこじつけたって許される。」

だから脚本を書くのは実に簡単なことだよ。馬鹿どもにとっては、遠くて厳しい真実よりも、近くて快い虚実のほうが、よっぽど納得しやすいからねえ」

キンナラが作る戯曲は、まさしく、こうした理念のもとに作られていたのです。そして、言葉の最後に、キンナラは次のようにつけ加えたのです。

「ここまで来ればあとは易しい。中毒者たちはもう、すぐにでも島の滅亡を導いてくれるだろうよ」と。

さて、長雨をものともしないのは、なにもデルフィー中毒者たちばかりではありません。

一度は統治者としての責務を、すべて投げ出そうとしたチェリアでしたが、三週間ほど前、青いアトラスに諭されてからは、彼女はそれ以降の毎日を、村の家々を巡回していく、という勤めのために使い果たしていました。

今日西に行ったならば、明日は東へ、と、天の底が地上に迫ってきていた時と同じように、否、体が軽くなったぶん、それ以上の頻度でもって、村という村を巡り巡っていたのです。

また、チェリアは個々の家を回っていくだけでなく、五日に一度は広い土地を使い、

「私たちが全体として為すべきことは何か」

と、人々を集めては、家庭を巡回するなかでは説きにくい、島の建てなおしについての「総論」を訴えることも忘れませんでした。

雨に打たれながら熱弁をふるうチェリアに、むろん私欲のようなものはなく、その徹頭徹尾の無私な態度のため、不快な雨のもとであっても、彼女の話を聞こうとする者たちの数は、つねに一定の数を超えていました。

そして、このようなチェリアの熱意に応えようと、島民たちもまた、自分たちに出来る最大限の働きを見せていました。

島でとれた作物は、その一割を、巫女が住んでいる砦に上納する決まりでしたが、人々は、その豊かな一割の作物をチェリアに見せたいがために、つらい雨下の作業でも、まず日をあけて休むということが無かったです。

彼らは、日々の単調な作業に、それはそれは熱心に勤しんでいました。

このような人たちであれば、一日のなかに、アトラスたちに向かって感謝の意をあらわす時間をとることなど、まったくもって当然のことでありましょう。

テピト・テアナの平和は、彼らアトラスによって、一時的に仮設されているものに過ぎませんし、天を支えるアトラスの腕は、そのまま、自分たちにとって最後の生命線でもあるからです。

とはいえ、こうしたアトラスに対する感謝の気持ちは、巨人たちと一番親しく付き合っているチェリアの中でこそ、もっとも純粹の極みに達していました。そのため彼女は、ラノ・ララク山を訪れる、その

度ごとに、慣習と化すことのない、つねに新鮮な感謝の言葉をアトラスたちに捧げていました。

もちろん今日も同じようにです。

青いアトラスの掌上にあって、チェリアが語ります。

「お疲れでしょうに、私たちのために天の底を支えてくださって、本当にありがとうございます。本当に、本当にありがとうございます。本当は一日中でも、そう言っていたのですが、さすがにそういう訳にもまいりません。ですから、せめて私の感謝の情が、心からのものであることを察してください。どうかお願いします」

青いアトラスは、チェリアの頭上からやさしくそれに答えます。

「天の底を支えることは、君が思うほど苦にはならないんだよ。僕たちは、ずっとこうして生きてきたんだから。それより君こそ大丈夫なのかい？ この雨が体の毒にならないはずがない。悪い風邪なんてひいちゃだめだよ。華奢なチェリアの体を見ると、そのことが心配で、こっちのほうに先に参加してしまいそうだ」

プツ、と軽く吹き出すようにしてチェリアが笑います。

「嫌ですね。見かけよりも、ずっと遅いのですよ、私は。」

そして、それに負けず劣らずの野太くて遅い神経。これはアトラスさんの言葉によって養われたようなものですけど、いまの私は、少々の難事があっても、それを見てたじろいだりは決してしません。

たとえば、心底小さくなってほしいと願っているオンパロスが、いまも変わらずに膨らんでいる事実を確認しても、です。その証拠に、こうして今、落ち着いた面持ちでアトラスさんの前に立っているのですから」



朗らかな少女の笑みは、やがて大人びた苦笑へと変わっていきました。そして、そんなチェリアに対する、青いアトラスの、

「それじゃあ、今も……」

という語りかけは、チェリアの表情を、今度は急に凜としたものにさせました。

「はい、残念ながらオンパロスは縮まっておりません。私が至らないせいでしょう。

けれど大丈夫。落ち込んだりはしません。だって、どんな状況であれ、自分がしなければならぬ事は分かっているのですもの。それを前にして塞いでいては、怠惰のそしりを逃れられません。そんな怠惰な暮らしをしていたら私、恥ずかしくて、こうしてアトラスさんの前になど立てませんもの」

アトラスは、チェリアの言葉を嬉しそうに受けとめ、押しつけがましさの全くない励ましの言葉を返しました。

「きっとオンパロスは小さくなるよ。チェリアが今のままの強さを持ち続けたならば、いつかはきっと。その時が来るまでは、僕らアトラスがちゃんと天の底を支えていてあげる。だから、君は君が思うとおりにやればいいんだ。いいね」

アトラスの励ましに対し、チェリアが、そんな……と目を伏せました。

「そんな……違うんです。いまは目前のことだけを考えよう、今は自分が出来ることだけを考えよう、と、私は、そうした気持ちで自分を支えているに過ぎません。そんな私を強いだなんて……あなたの言葉を認めてしまったら、私にとってそれは大きな自惚れになってしまいます」

しかし、そんなチェリアの告白を聞いても、アトラスは少しも落胆せず、

「ううん、今の言葉でも分かる。君は強くなったよ」

そう、暖かく澄み渡った声で言いました。

（2）青空の中で

「君は強くなったよ」

そうアトラスに褒められ、これを心から嬉しく感じるチェリアでしたが、その反面、どうにも照れくさを隠しきれません。そのため彼女は、やや拙劣な調子でもって、会話の方向を変えようしました。

「でも、すごいですよね。天の底を支えるあなたの二の腕は、厚い雨雲の層をこえて彼方の世界に触れてらっしゃる。そのためでしょう。こんな雨模様なのに、あなたの透明な体を通して、この雲下の世界にも、日の光の一端が差し込んでくるんです。つまり、アトラスさんの腕が光って見えるんです。それがキレイで、すごいです」

「そう？ 自分では当たり前のことで、あまりすごいとも思わないけど」

「すごいですよ。だって、雨だというのに、アトラスさんたちが集まっているこの場所では、どこよりも、そしてどんな時よりも、清らかな日の光が見えるんですもの。とくにあなたの青い体の鮮やかさといったら、ほとんど神秘的と言っていいぐらいです」

img071.jpg



こうチェリアに褒められ、アトラスもまた、少し照れくさそうに言いました。

「チェリアは、雨空と晴れた空では、どっちが好きかな」

「え……それは、やっぱり晴れた空が好きです。とりわけ長い雨季のあいだは、いつもの何倍も、青空が見られることを夢見ます」

「なら……」

と、アトラスは、急にチェリアを乗せた左手を自分の胸にくっつけ、チェリアにとって、アトラスの胸が壁、アトラスの左手が床、というような状態をつくりました。そして、その奇妙な動作に驚いているチェリアに笑って言います。

「どうか脅えないで聞いてね」

「え、え、何ですか？」

ドギマギしたままのチェリアを落ち着かせるべく、青いアトラスが、重ねて笑顔でもって言葉を選びます。

「うーん、あのね、その……ハハ、まずは脅えないで、だよ。僕の胸に飛び込んでみてほしいんだ。その、ね、壁をつき破るようにして、この胸に飛び込んで来てほしい」

「……それでは、あなたの固そうな胸板にぶつかってしまおうでしょう」

「いいんだ、それで。思い切りぶつかるつもりでおいで」

でも、それでは……と、チェリアはなおも不安の言葉を並べようとしたが、アトラスはそれをさせず、今度は、説き伏せるような強い調子でもって「いいから」とだけ言いました。

こうなると、チェリアもそれ以上には、アトラスの意向を拒むわけにはいきません。彼女は、頬を強張らせつつ目をつむると、意を決して身投げするように、その青い障壁に向かって、雨に濡れた我が身を投げつけました。

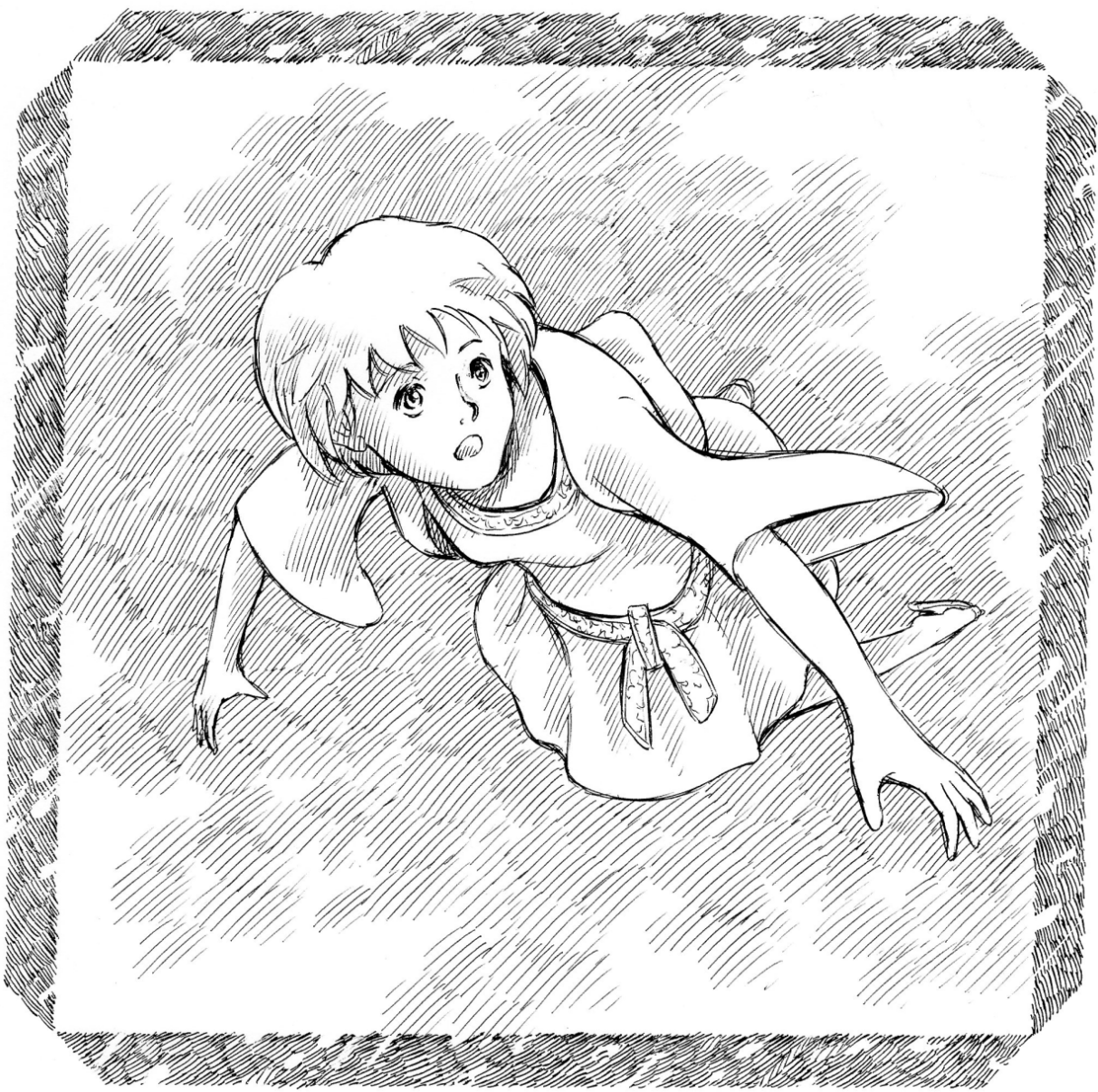
「なに、これは、海？ なに、何なの！」

チェリアが身を投げ出した直後です。海で泳ぐときのような浮力が彼女を支えたかと思うと、続けざまに吹きつけてきた風が、今度は「私は空に浮かんでるの？」という、別の新しい感覚をチェリアに与えました。

こわごとと彼女が目をはらくと、眼前に清冽な「青」で満たされた空間が迫ってきます。そして、その「青」の見慣れた色みが、混乱するチェリアをして、それでも自身の居場所をちゃんと理解させました。

「この鮮やかな青……ここは、もしかしてアトラスさんの体の中なの？」

img0072.jpg



（そりゃそうさ、君は僕の胸に飛び込んだんだから）

アトラスが即座にそう言うのと、でも……と、チェリアが驚いたままの声で応えます。

「あの重い天の底を支えるほど堅固な体のなかに、こんなにも簡単に、私が入ってしまえるなんて。でも、あなたの声は、口から放たれるときは違って、まるでしみ込んでくるように、この胸に直接響いてくる。ああ、やっぱり私はあなたの中にいるのですね」

アトラスが少し悪戯っぽく笑います。

（君が好きだと言ってくれたんでね、だから、こうして晴れた日の空に招待してあげた訳なんだ。でも、僕の体がチェリアを招き入れることは、君が思うほど不自然じゃないと思うんだけど。ねえ、ちょっと下を向いてみてよ）

チェリアがアトラスの言うとおりにすると、巨人の胸あたりに漂っているチェリアには、はるか下のほうに、アトラスの大きな足を見ることができました。

（そう、その足の裏あたりを見てほしいんだ）

「足の裏あたりというと……えっ、あなたの足で踏みつけられているはずの雑草が……どうして？

押しつぶされてないわ。あなたの足を突き破って、足の裏側で青々と生い茂っている。なんてヘンテコな話なの」

（ヘンテコって、ハハ、僕が草木を潰してたら、それこそおかしいよ。

だって空は、何万年にもわたって、ずっと天の底を支えていたんだし、その空の下で、草木たちは好きなだけ生い茂ってきたんだもの。そして、僕らアトラスの本質は、その「空」なんだもの。空が、いまさら地上の草木を押しつぶすなんて変だよね）

「あっ」と、アトラスの本質が何であるか、それを忘れていたチェリアが短く声をあげました。それを尻目に、アトラスの言葉が誇らしげに、さらに続けられます。

（僕らは空だから、この「僕」という意識が消えた瞬間、その時点でこの巨人の体はなくなるし、そうなれば、僕がいた場所には、単なる空が広がることになる。逆に言うとな、つまり、僕の意識があることが、そのまま僕の体があることを意味してるんだよ。

僕らにとって、意識は体そのもの。体は意識そのものだ。それだから、自分の思うまま、こうしてチェリアを体内に招いてしまう事なんかも出来るんだ）

（だから、こんなことも出来るよ）

アトラスがそう言うと、チェリアの体が上方へと、つまり胸から肩へ、肩から腕へと、どんどん登っていきましました。まるで上のほうから吸い込まれるようにして、さらに腕から手のほうへと移動していくのです。

この時アトラスの腕は両方とも天の底にむかって掲げられていましたから、チェリアの体は、その天の底にどんどん近づいていっている事になります。

「まぶしい……」

天の底が近づくにつれて、チェリアは溢れるような光の洪水に襲われました。太陽の間近まで至った

ような感じで、それまでの雨模様からは、想像もつかないような光の氾濫状態です。それは、もはや絶句するしかないほどの景色でした。

（チェリア、これが、僕の手が触れている天の底だよ。人の目には眩しすぎるかもしれないけど、目をつぶればチェリアにも近づけるし、もっと手を伸ばせば、ほら膜にさわれるだろう。そして、この薄膜の上には、天上の世界が広がっているんだ。温かくて輝かしい世界、そして僕の故郷だよ）



たしかに、その時チェリアを包んでいたのは、限りなく優しい温もりでした。ええ、すでに驚きも恐ろしさもありません。いまの彼女に感じられるのは、ただ永遠の安らぎばかりだったのです。

「母さん……」

まるで母親に抱かれているような温もりが、チェリアの口からそんな言葉を漏れさせました。天上の光が、なぜか強烈に懐かしい気持ちを呼び起こすのです。

彼女の目からは自然と涙が流れ落ち、その涙を感じたアトラスが、労わるようにチェリアに思いを伝えました。

（そうだね、天上の世界には君の両親もいるだろう。地上からは、太陽や月、星として天空に見えているものが、天上界の住人には、太陽はヘリオスさまに、月はセレネさまに、そして星は、無数の天使や霊人に見えるのだからね。きっと、その霊人の中には、チェリアのご両親も混じっていることだろう）

「じゃあ、私のすぐ近くに、お母さんとお父さんがいるかもしれないの？」

（うん、きっとね）

そう青いアトラスが答えたとき、天の底から、非常に小さな声が聞こえてきました。アトラスのそれと同じような、チェリアの心に直接響くような声です。

（私たちも見ているから、残された時間を、どうか後悔しないように生きて）

「お母さん！」

それが母セフィーネの声であるような気がして、チェリアは興奮して叫びました。

ですが、それと同時に彼女は目を開けてしまい、その信じがたい光量に目を眩ませてしまいます。チェリアの意識は一瞬にして失われ、アトラスとしても、とても彼女を放置しておけない状況となりました。そのためチェリアは、羽のようにゆっくりと下降し、目を覚ました時には、すでにアトラスの掌上で横になっていました。無論そこはアトラスの体外であり、晴れた空などではあり得ない「雨下」です。その雨下で、雨粒が彼女の目を覚ましたのでした。

「大丈夫かい、チェリア」

「アトラスさん？　今までの夢ですか……」

「いや……ちがう。君を危険な目に遭わせるつもりは無かったんだけど、ごめんね」

チェリアは起き上がりながら首を横に振りました。

「謝らないでください。私にはアトラスさんに対する感謝の気持ちしかありません。それどころか、変なところで目を開けてしまって、私のほうこそ馬鹿なんです。心配かけてしまって、本当にすみませんでした。ところで……アトラスさんにも、あの声が聞こえましたか」

「声？　知らないけど……チェリアがお母さんと言ったときかな」

「ええ、たしかにお母さんの声に聞こえたんです。懐かしいお母さんの声に。……でも」

「でも？」

「あっ、いえ、何でもないです」

そう言って手を振るチェリアでしたが、その心には、母のものとおぼしき声が語った、「残された時間

を」という言葉が、魚の小骨のように引っかかっていたのです。

（3）民の苦痛、巫女の苦悩

テピト・テアナは相変わらずの雨模様ですが、そうした天候の単調さとは対照的に、驚くほど大きな、そして恐ろしい変化が島を襲いました。それは雨季に入って一か月を境に突如として顕れ、チェリアたちを一気に深い悩みへと陥れたのです。

「島のあちこちから、似たような、しかも激しい症状を訴える病人が続出するなんて」

とチェリアの嘆息は、深く苦しげに、そして何度も繰り返されました。

その病人たちは、例外なく針で刺されるような頭痛に苦しみ、また動く自由を失うほどの関節の痛みを訴えていました。とくに激しいのがその震えで、呻きながら痙攣するため、傍目からは、悪魔にでも取り憑かれているかのように見えるのです。

「うわわわわ、痛い、死ぬ、死ぬわわわわ、死ぬわわ、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い」

彼らはこのように呻き、かつ激しく震えていたのです。

これらの病状を報告されたのはいずれも男性で、以前にデルフィーを服用していた点でも共通していました。

ようするに薬物による禁断症状なわけですが、今回の禁断症状は、そうとう中毒が進んでからの発症であるため、当然その症状が重いものにならざるを得なかった、そういう訳です。



img081.jpg

彼ら以前にも——たとえば空が重かった時期にも——デルフィーによる禁断症状は見られましたが、その症状たるや、今回のものとは比べものにならないほど軽いものだったのです。

実際、今回の病状を訴える男たちは、ほんの二か月前まで、「偉大なるキンナラさま、マゴラーさま。どうか私たちのために、聖なる薬デルフィーをお与えください」とやっていた者たちでした。デルフィーについても、その当時は、まったく疑問を抱くことなく相当量を飲んでいたのでした。

ですが、ラノ・ララク山でチェリアの説話を耳にした彼らは、それによって心底自分たちがしていたことの恐ろしさを知りました。だからこそ彼らは、このとき即座に「かつて自分たちが属していた集団から決別する」という意志を固めたのです。

家庭に戻ってからは、むしろ彼らは、デルフィーともキツパリと縁を切っていました。

けれども、デルフィーが相当な劇薬であることは間違いありません。これを飲み続ければ狂い死ぬこともありますし、逆に急に飲むのをやめた場面も、それはそれで命の危険に見舞われることを余儀なくされるのです。

そこに麻薬の恐ろしさがある訳ですが、それほどにも切実に命が危ぶまれるほど、今回の禁断症状は深刻なものだったのです。

しかも、その禁断症状の苦しみに追い打ちをかけるように、降り続ける雨が、その狂暴な湿気によって、患者の苦痛を倍化倍増させずにはおきません。湿気の冷やかさと不衛生さによって、患者たちの体は、まさに暴力的なまでに痛めつけられていたのです。

これまで麻薬に類するものなど存在しなかったテピト・テアナでは、薬物中毒と禁断症状を結びつける病理などありません。

しかし、だからといって「症状を訴えているのが、皆かつてのデルフィー中毒者である」という事から、その関連性を推察できないほど愚鈍な、不甲斐ない者たちばかりが、砦に集まっていた訳では決してありません。

チェリアの炯眼もまた、この関連性をいち早く見抜きました。そのうえで、この患者たちの病状が、ある種「更生過程の一環」として現れているものなのだと、そのようにも考えました。

「となれば患者たちは、かつての過誤を償うために苦しんでいることになります。彼らは、ああやって苦しみながら、それによって、本来の自分を取り戻そうと頑張っているのです。

これは重大なことです。なぜなら、彼らのような決断をし、彼らのような苦しみを甘受する者が増えなければ、島に本当の平和が戻ってくる事はないからです。そういう意味では、患者たちは今、島で誰よりも尊いことをしている方々だと言えるでしょう」

侍従たちを含めた砦の住人たちを前に、チェリアが強く訴えるように言いました。

「患者たちは、いわば島の救い主たちなのです。

ならば私は、彼らにこそ穏やかな生活を与えてあげたい。なのに、実際には、彼らはあんなにも度を超えて苦しまなければならないのです。

償いという意味で、その苦痛が仕方のないものだとしても、私のなかで、憐憫の情は理をこえて訴えてくるのです。彼らの苦痛を、たとえ僅かばかりでも減らしてあげたいと。

皆に集うあなた方にお願います。もし患者たちの苦痛を和らげられる手段、手がかり、そういうものを知っていたら、どうか、それを私に教えてください。

もし教えてくださったなら、その人に対して、私はどんな褒賞も惜しむものではありません」

そのようにして様々な対策を模索したのにも関わらず、病難にあえぐ患者たちにチェリアが出来たことといえば、ただ励ましの言葉をかけるぐらいのものでした。物理的な治療については、結局なにひとつ、手の施しようがなかったのです。

「こんな病気が治らない訳がありません。どうか痛みに負けないでください。きっと時間があなたを癒してくれるはずです」

チェリアがそう言いながら患者の手を握りしめました。

（自分にできるのは、こうやって激励しつづけることぐらい……）

そうは分かっているけど、苦痛にうめく患者を見ると、チェリアは、どうしても悔しさとやる瀬なさを抑えることができません。すべての病人を順に見舞おうと思いつつも、情に流されて、ついつい一つの家に留まる時間が延びてしまいます。

この日も同じで、数人分の病床を回るだけで日没を迎えてしまうという、どうにも能率が上がらない一日を過ごしてしまいました。

いまだ雨季の半ばながら、ここ二、三日は降ったり止んだりの天気で、今日は霧雨が島を覆っている程度です。チェリアは憂悶を引きずりながら、暗い夜道を足先で探るように、ぬかるみに足を取られないよう、慎重を期して家路を歩きました。

ところが、皆に向かって歩くうち、背後から自分を呼び止める声があります。

「チェリアさま」

聞きなれた声であり、チェリアには、それがアサジのものだということが難なく分かっています。そして、近くにアサジがいると分ったとたん、心臓の鼓動が早まり、それに伴って顔が赤らんでいく自分の変化についても分かります。

（色々と問題が多くて、最近はお見舞いにいくことも出来なかった。だからずっと顔を見られなくて……そのせいかしら、ほんの少し声を聞いただけなのに、こんなにも頬が熱くなってしまう）

チェリアは、せめて焦りと火照りだけでも気取られぬよう、振り返りざま、わざわざ落ち着いた作り声を演じて返事をしました。

「あらアサジさん、もうお怪我のほうはよろしいのですか」

何も気づかないアサジは、そうしたチェリアの内心に頓着することなく、何気ない、普段どおりの口ぶりで答えます。

「ええ、もうすっかり良くなって、最近は、散歩がてらに村を巡回しているぐらいです。体力も戻ってきましたから、そろそろ、あの薬売りたちを探す任務に戻らなければ、と考えているところです。でも、その前にちょっとした気がかりがあって……」

「気がかり、ですか？」

「はい、今も巡回の帰りなのですが、そうやって村を巡回していると、同じような症状の病人を何度も見ることになるんです。そしてチェリアさま、その病人を見るごとに、私の中でキナ臭い胸騒ぎがするんですよ。こういう胸騒ぎがするときには、必ずと言っていいほど、何か悪いことが起こるのですが……どうも言葉では説明しづらいですね」

そのアサジの言葉を聞いて、

（つまりアサジさんは、本能的に薬売りたちの所業と、あの病人たちを結び付けてるんだわ。さすがは勇者の勘）

と感心すると同時に、チェリアはそのとき、自分の肩から力が抜けていくのを感じざるを得ませんでした。アサジの、この病氣に対する認識がまだまだ表面的なものでしかなく、いまや悩みの淵にある自分と比べて、その気持ちのありようが実に気楽そうに思えたからです。

チェリアには、これまで療養院に入っていたために、病氣のことを何も知らずにいられたアサジのことが羨ましく感じられました。皮肉まじりに「気楽ですね」と、本当にそう言いたくなるような羨ましさです。もちろん、妬みなどとは無縁の気持ちですが。

（彼に病氣のことを話すべきかしら）

何も知らないアサジに「デルフィーと急発生した病氣には関係がある」などと話すことは、怪我の快癒に浸っている彼に、いらぬ心労を押しつけるようで気が引けました。なぜなら、デルフィーを広めている老婆キンナラを探し出すことは、かつてのアサジにとって最重要任務だったからです。

しかも、それはアサジが、ついに結果を出せなかった任務でしたから、そのために、

「自分が老婆を探し出せていれば、こんな病氣は発生しなかったのに」

と、そのように彼に思わせる恐れがあります。そうなる事は、チェリアにとって、あまりにも心苦しいことでした。

しかし、やはり勇者に島の現状を伝えるのは、巫女の義務であろうと信じ、チェリアは、病氣とその原因について詳細に話していききました。

案の定アサジは、チェリアの話が進むほどに深刻な顔になっていききました。

周りが暗いため、その表情こそ確かめられませんでした。それでも、あからさまと言っていないぐらゐの、彼のまわりに漂う空気の重苦しさだけは、チェリアにもひしひしと伝わってきます。そして、話の全貌を話しおえたチェリアが、

img075.jpg



「本当に、患者たちの苦痛を和らげられる薬でもあればいいんですけど」

と話を区切ると、それを皮切りにアサジは、一切の手出しがはばかれるほどの、それほどにも厳肅な沈黙を張り巡らせました。彼の体は悲痛にこわばり、暗がりには隠れた表情には尋常ならざる苦痛が宿っているように思われます。

そして、それは厳肅だけでなく、不自然なまでに長い沈黙でもありました。そうして沈黙している間に、かねてからの雨脚が強まり、もはやそれを霧雨とは呼べなくなったほどにも。

しかし、身を切るような沈黙もやがて終わりを告げ、激しくなった雨のもと、アサジはやつのことで、苦しい言葉を吐き出しました。

「チェリアさま、あなたが望むような薬がないでもありません……どうかバツティーヤさまのところへ赴いて、あの方から詳しい事情をお聞きになってください」

「どういう事ですか？ 祖父さまが何を知っているというのですか」

チェリアが驚いて尋ねても、アサジは何一つ答えようとはしません。無言でチェリアに一礼すると、その激しい雨のなかを歩き去っていききました。

「アサジさん……？」

粒の大きくなった雨が、釈然としないままのチェリアを打ちつけるばかりです。

（4）再現

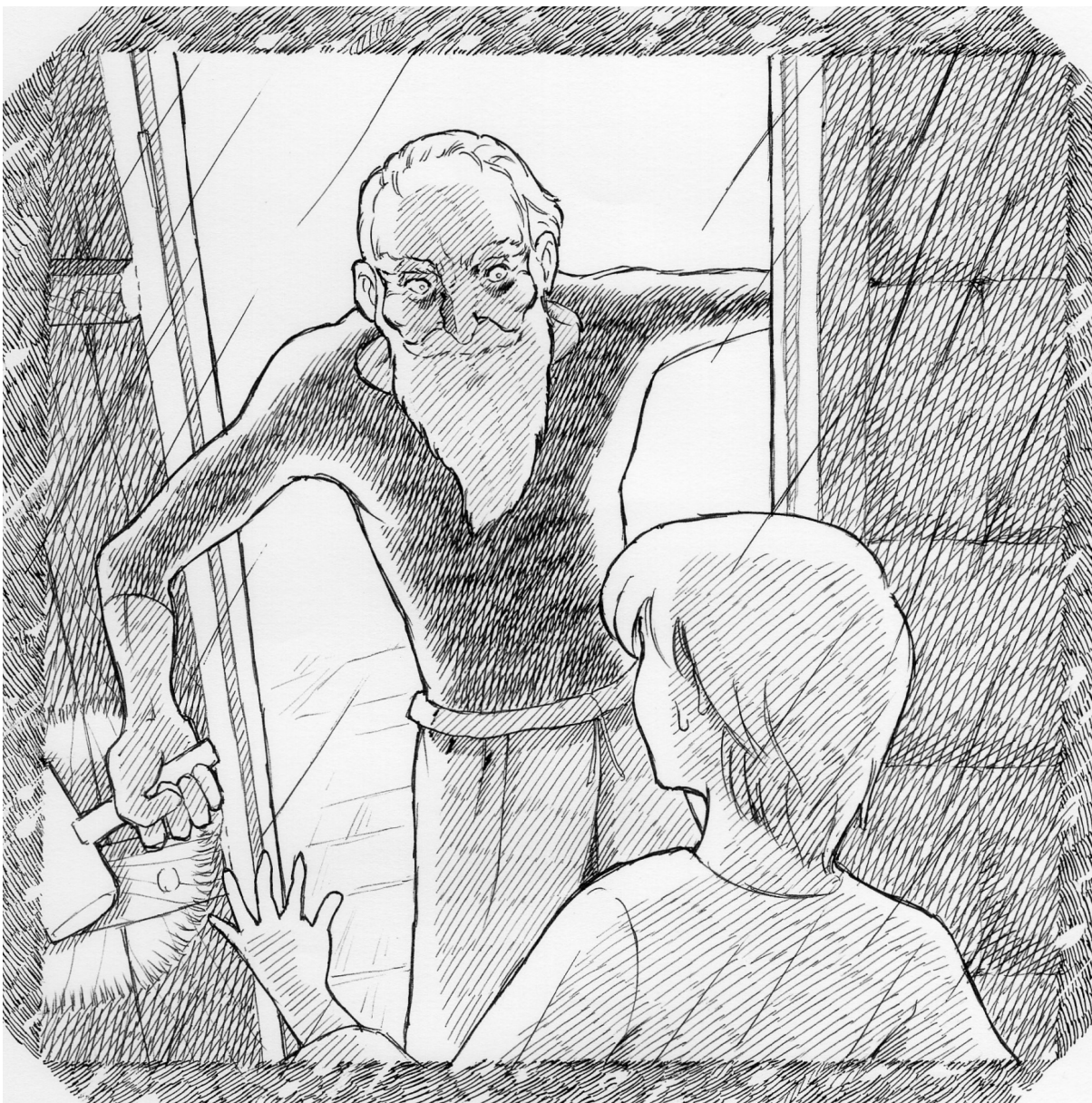
チェリアは砦への帰路を翻し、そのままの足で、祖父バツティーヤの住まいへと向かいました。村はずれに切り立ってそびえる岸壁、その岸壁に寄りそうように建てられたバツティーヤの家は、民家とは思えないほど頑丈な石造りです。

「こんばんは」とチェリアが戸口を叩くと、かなりの時間を置いてから、右手に木槌を持ったバツティーヤが現れました。

チェリアの前に立ったバツティーヤは、目の下に濃いクマがあって人相が悪く、着衣もずいぶん汚れています。そんなナリをしている上に、木槌まで持っているのですから、チェリアにとって、こんなにも祖父が恐ろしく感じられたことはありません。

「お、お祖父さま、何ですかその恰好は！」

img076.jpg



そうチェリアが叫ぶと、バツティーヤも訪問者の素性が分かったらしく、しかめ面をすぐさま綻ばせて、手の内にあった木槌も脇に放り投げました。

「おおチェリアか、驚かせてすまん。この汚い恰好は、ちょっとした彫りものの作業をしていたせいだな。しかも、ここ数日間、その作業に没頭しておったもんで、少しばかり疲れが溜まってきておる。面構えが険しくなっただけなのは勘弁ねがおう。

でもまあ、よく来た。お前がここに来るなんて久しぶりじゃ。とにかく入れ入れ」

そうやって迎え入れた孫娘を明るいうちで見ると、その姿は、まさに濡れネズミと言うほかありません。風邪をひくのではないかと心配したバツティーヤは、傍らの古い荷物箱に手を突っこみ、その中から手頃な衣服をつかみ取りました。

「ほれ、ババの服じゃ。体を冷やさんよう、早くこれに着替えなさい」

ところが、こう言ったのにも関わらず、自分から目を背けようもしない祖父を、チェリアが軽く睨みつけました。

「なんじゃ、チェリア……おっ、こりやすまん。年頃なんじゃな」

持ち前の無骨さを露わにして口ごもり、必要以上にオタオタしながら隣室に向かう祖父を横目に、チェリアは、その雨に濡れた着衣を脱ぎだしました。

そうして用意された、少しホコリ臭い服に着替えると、彼女は、祖父の寢床に散らかされた石板と彫刻道具を見だし、何気なくそれへと近づいていきました。バツティーヤの言う彫りものとは、おそらくこの石板を指しているのでしょう。

「この石板は何なんですか。どうやら文字が彫ってあるようですが、ええ……」

島の勇者バツティーヤが記す。島の民、そのとき心汚れて、みずから空の災いを呼べり。しかし古文書は語る。救い、北にありしと。ゆえに巫女の命はくだる。北の大陸に使いを送らんことを。使いの者、その名をアサジという。この者、新しき勇者なり。

やがて、民の頭上に、空の重石積み上げられん。苦しみの声は島に満ちる。

されども、そのとき一条の光さし込む。苦しみの淵に一条の光さし込む。北より光は来たり。北より救いは来たり。彼らアサジと共に来たり。その救い、己が名をアトラスと名乗らん。巨人アトラスと名乗らん――

……と、これは今までにあったことの記録ですよね」

そう孫娘に尋ねられると、隣室のバツティーヤは、年甲斐もなくはにかんでみせました。

「うむ、子孫に残せればと思ってな、まあ書いてみた」

そう言いながらチェリアの傍まで歩いてきたバツティーヤでしたが、孫娘の姿を近くで見ると、急に体の向きを変えて目をそらしました。それを不思議がるチェリアの「どうしたんです」という言葉に、バツティーヤは、

「いや、べつにお前を見たくない訳ではないのだ」

そう妙に照れた声で答えました。

「わしの顔が、年甲斐もなく赤くなっているのを、お前に見せたくないだけなんじゃ。まさか、こんなところでババの若いころの姿を見るとは思わなかったのだな。不意を突かれてこの有り様じゃ。その古い服をまとった姿は、いかにもババに似ておるよ。わしが喜びを抑えられないほどの……お笑い草じゃな」

普段、まず見せることのない、そのように純粋な喜びを露わにする祖父に対してさえ、チェリアは、半ば厳しい口調で「申し訳ありませんが」と本題を切りだすことを辞しませんでした。この重要性を考えると、祖父の思い出ばなしに付き合っている余裕など、あるはずもなかったのです。

「ずいぶん切羽つまってるようじゃな」

バットイーヤも、孫の厳しい口調を耳にして、すぐにいつも通りの固い表情に戻りました。が、しかしチェリアが、

「実は、島に蔓延している妙な病気に対して、アサジさんが気になることを言ってきたのです。そのことについて伺いにまいりました」

と言いつ、さらにアサジとの先ほどの会話を再現させていくと、まるでアサジの真似をしているかのようになり、バットイーヤまでもが、厳粛にして長きにわたる沈黙を張り巡らせていくのでした。

そして「そんな薬がないではありません」というアサジの言葉までを再現し、これにかかる形で、チェリアが、

「……本当に、そんな薬があるのでしょうか」

と言ったとき、バットイーヤの沈黙は、アサジ以上の痛々しさを感じさせるものになりました。その眉間は実に深々とした皺を刻んでいます。

（つまり、アサジはわしに全部話すように促しておるのじゃ。あの薬のことを。

じゃが、誰ならその薬を見つけられるのか、どうやって手に入れればいいのかを話したら、わしはどうしても、巫女セフィーネと、勇者コースタニヤについて、語らなければならなくなる。あの二人の最後について話さなければならなくなる。

そうじゃ、これまでずっと、チェリアに隠してきたものを。アサジとチェリアの関係を考えて、ずっと隠してきたものを……）

まさに観念して、という言葉がぴったりの口調で、バットイーヤが話し始めました。

「チェリア……不治の病をも治すといわれている薬、そのような薬があることは、わしも知っておる。『地魔』という難病はお前も知っとるじゃろう。薬は、その地魔にも効くというのだから、お前が懸念している病気にだって、当然効くじゃろうよ」

「地魔にも効く薬ですか。それはすごいですね」

「ああ、七年ちかく前、とある村に母と息子だけで暮らしておる家があつてな、その母親が地魔にかかってしまった。不治の病である地魔にな。

息子は継るようになって巫女に救いを求めたんじゃ。巫女セフィーネに、母を救ってくださいとな。たしか今日のような、激しい雨の降る日ではなかったらうか——」

バッティーヤの話は、その薬というのが海中に生えているサンゴの卵であること、セフィーネが巫女の第一律、すなわち「島を出てはならない」という掟を破ってまで、訴えてきた子供の母親を助けようとしたこと。それに同意したコースタニヤの宣誓。そして船着場からの出立。つまり、嵐の海のなかに消えていった巫女と勇者の描写に及びました。

「……じゃが……じゃが、それっきりじゃった。」

『この命にかえてもサンゴの卵を手に入れ、そうして絶対に巫女を、雨で荒れる海から連れて帰りましょう』
コースタニヤはそう誓ったのに、巫女と勇者は、船もろとも、二度と島に戻ることはなかったんじゃ。もちろん薬も手に入らず、ゆえに地魔にかかった母親も亡くなった。息子は、降りやまぬ雨の下でこう言った。

『三人もの人たちが死んでしまった。そして巫女と勇者は僕が殺したも同然なんだ』

とな―――」

img077.jpg



さらにバッティーヤの話は続けられました。自責に苦しみ、自らの命を絶ってくれと頼んできた少年に対して、バッティーヤが一つの命令を与えたこと。

それによって、少年が「死にたい」という気持ちを思いとどめ、バッティーヤの命令を果たすことを、泣きながら誓ったこと。話はそこにまで及びました。

「その子供は、突きつけられた命令を受け入れ、自分のために生きる命を捨てた。わしに命を捧げたのじゃ。そうした経緯ののち、努力と忍耐を重ねたすえ、少年は約束したとおり、先ごろ島の勇者となった」

ここまで祖父の話を耳にしたチェリアは、次第に気を失っていった顔を、さらに青ざめさせながら尋ねました。答えが分かっているとしても、それでも尋ねずにはいられませんでした。

「では、その息子、少年というのは……」

そのとき、戸口のあたりで大きな物音がしたので、チェリアとバッティーヤは同時にそちらを振り向きました。すると色あせた扉がゆっくりと開かれ、そこから堂々たる肉体を誇る若者が、雨にぬれた体をそのままに屋内に入ってきます。この若者を見て、チェリアが重い石を持ち上げるような調子で呟きました。

「アサジ……さん……」

びしょ濡れのアサジは、入ってくるなり、チェリアと老人に深々と頭を下げ、まず最初にバッティーヤに向かって言いました。

「バッティーヤさま、私は過ちを告白しなければなりません。私は……怪我のためとはいえ、安穩とした療養生活に埋没することによって、島の危機に対して無関心になってしまいました。」

この怠慢によって、チェリアさまは一人で大きな困難を背負う形となり、蔓延する病気を前に、ずいぶん苦しい思いをされたようです。

それだというのに、巫女を命がけで守るべき私は、危機を傍観するどころか、そうした危機があったことも知らずにいたのです。まさに勇者失格です。この事については、あとで、どんなお叱りも受ける覚悟です」

アサジは、今度は目をチェリアのほうに向けて、真剣な、そして底抜けに寂しい声で言いました。

「あらましはバッティーヤさまからお聞きになりましたね。」

その話のとおりです。セフィーネさまとコースタニヤを死なせたのは私です。私はチェリアさまにとって、どんなに憎んでも憎み切れない、そういう素性の者です」

「……そんな」

「ですが、病に苦しむ患者たちを思うなら、今はそれを忘れてください。」

船着場に、整備をすませた船を用意しておきました。今も苦しんでいる患者を救うため、チェリアさまと私が乗り込むための船です。

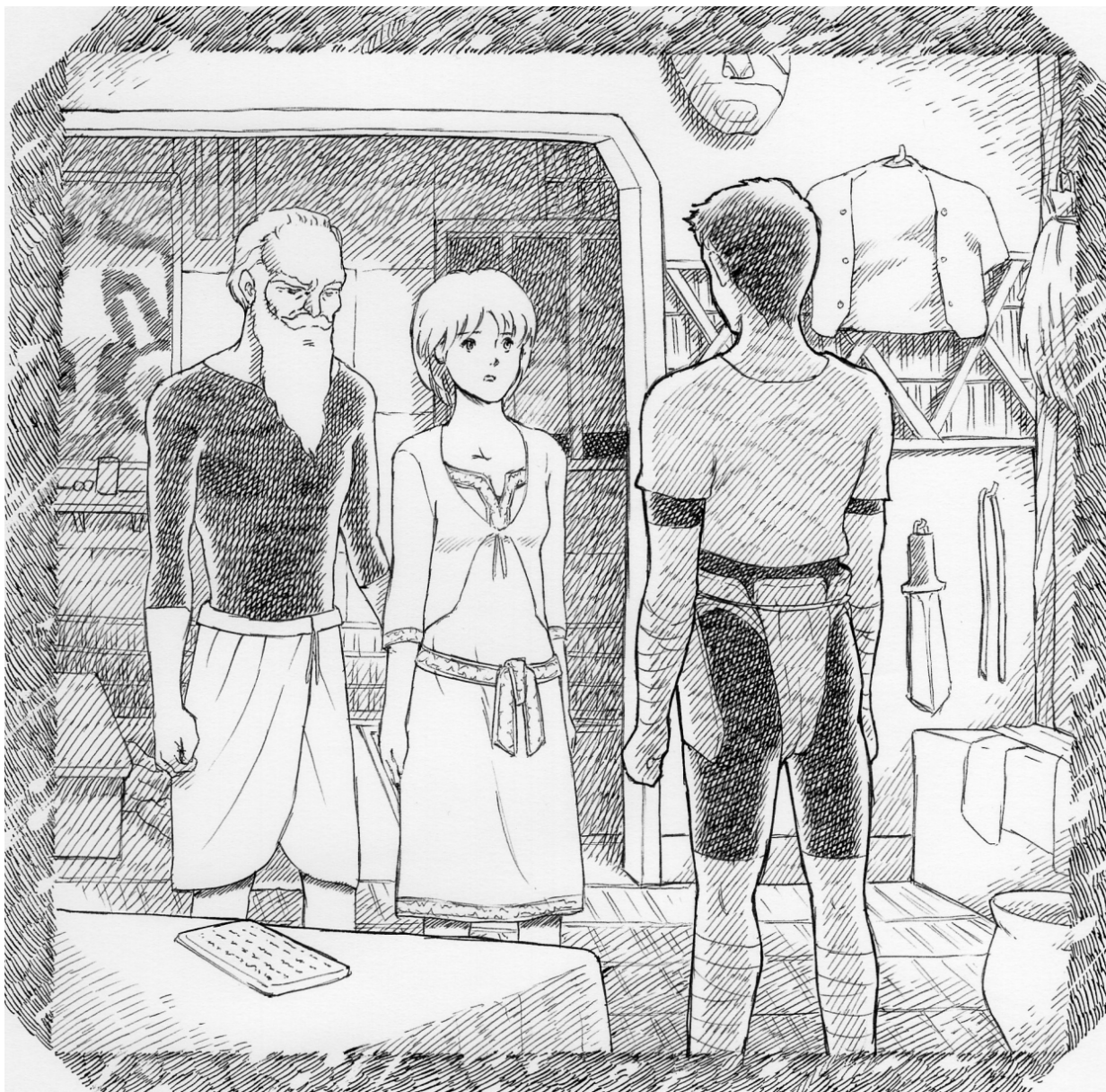
万病の治療薬となるサンゴの卵の話、それも聞きましたよね。私としましては、それを採りにいくのであれば『いつでも船を出航させられます』と言うことができます。そのための準備は全て済ませておきました」

「……」

「ですが、それほどの早急さを要する事でもないでしょうから、とりあえず風が止むのを待ちましょう。いま外では猛烈な風が吹いているからです。風による波の高さを考えれば、待機こそが、いま最も必要とされている対応です。」

チェリアさまは、いったん砦のほうにお戻りください。天候が落ち着きましたら、私がお迎えにあがりますので」

一気に言葉を連ねるアサジとは逆に、チェリアはとうから絶句しており、のみならず、その呼吸さえ、いまにも止まってしまいそうなほど細くなっていました。何がなんだか分からず、世界がぐるぐると回っている感じです。



そんな、混乱のなかで溺れているような気持のチェリアは、この恐ろしい破滅の淵から這い上がらんと、藁にもすがる思いで愛する男の名前を呼びました。

「あ、アサジ……さん……」

しかし、この悲痛な呼びかけに、アサジは気づいてもないようです。

「むろん、巫女を島外に連れ出すのは、たとえ勇者であっても許されないことです。巫女の第一律は絶対ですから。」

ですが、チェリアさまの心中には、掟を破ってでも、患者たちの病苦を払いのけてやりたい、そんな願いが満ちていることでしょう。ならば、私はその願いが遂げられるように努力するだけです。巫女の願いを、この命をかけて完全に果たしきる。それが私の存在理由の全てなのですから」

「……」

「私は誓います。大切なあなたのために、病に苦しむ患者のために、そして亡くなったあなたのご両親のために、この命に代えてでも必ずやサンゴの卵を手にし、そのうえで、あなたを無事に島に帰してみせると、そう」

このアサジの言葉は、誠意に満たされていたかもしれませんが。しかしそれは、今のチェリアにとって、さして興味のわからない、ただ無情としか感じられない言葉でした。

（5）魔術の必然

一向に止むことを知らぬ長雨は、かの風穴に暮らしているデルフィー中毒者たちに対しても、大きな影響を与えるようになっていました。

まず前提として言うておくべきは、住環境の不備についてです。

すなわち、風穴という自然物に過ぎない住処では、雨は、岩肌を伝わり、容易に中毒者たちが暮らしている空間まで届いていってしまうのです。これは、いくら固く戸を閉ざそうとも同じです。とくに激しい雨の日ではきめんで、そういう日には、風穴のなかには幾つもの水たまりが出来てしまいます。

そして、そうした湿気と不衛生さが、中毒者たちの体を、まさに暴力的なまでに痛めつけることになる

これは先に「村に戻った中毒者の苦しみ」として述べたことですが、その苦しみが、風穴で暮らしている中毒者たちにも、まったく同様に降りかかっていたのです。

ただし、この苦しみの大本になっているのは、飽くまでも、デルフィーを飲めないことによる禁断症状です。はじめに禁断症状による苦しみがあって、その苦しみを、湿気や不衛生さが助長するのです。

ですから、まず禁断症状が起これなければ、その後の、湿気や不衛生さによる苦しみの増大もない。そのように言うことが出来るでしょう。

少しばかり詳細に、ここにいる中毒者たちの様子を眺めてみましょう。

デルフィーを飲んでからしばらくすると、薬の効能が薄くなって禁断症状が始まります。

そのとき、村に戻っている中毒者には、その苦しみに甘んじ、喘ぐ以外のことは出来ません。手元にデルフィーがないのですから、そのようにならざるを得ません。

しかし、風穴で暮らしている中毒者たちは違います。

彼らの場合、禁断症状の兆候が現れ出したら、その時には、すぐさま新たなデルフィーを飲むことが出来るからです。なにしろ、彼らの傍らには、デルフィーを補給してくれるキンナラもマゴラーも、ちゃんといるのですから。

そして、新たにデルフィーを服用すれば、とたんに禁断症状も消えるわけで、そこに村に戻った中毒者たちとの決定的な違いがあるわけです。そればかりか、真新しいデルフィーの快楽は、世界に苦痛というものが存在すること自体を忘れさせてくれるのでした。

しかし、このようにして服用されるデルフィーは、その服用者の中毒症状を、さらに重度のものとなすにはおきません。

中毒の重度化とは、すなわち「薬が切れたときに味わう、より激しい禁断症状」と「薬の効能を感じられる時間の短縮化」を意味しています。

そのため「苦しいからデルフィーを求める。そうして求めれば求めるほど、苦しみから逃れていられる時間が短くなっていく。だから、さらにより多くの回数、デルフィーを求めるようになってしまう」という悪循環が始まります。

そして、この悪循環によって、中毒の重度化は、いよいよ加速度的になっていくのです。

そのため、風穴暮らしを始めたころには、一日三回の服用と決められていたデルフィーは、今や、なんと一日に八回の服用をすら必要としていました。この事実によって、中毒者たちの体と心が、いかにボロボロになったか、その進行の具合がはっきりと察せられることでしょう。

そのような中毒者たちに囲まれながら、朝、明るさを殆ど感じられない風穴の中で、イドは、老婆キンナラに頬を叩かれました。眠っていたのを起こされたのです。

「起きなイド。今日はめずらしく雨が止んでるから、マゴラーが外に出ても平気なんだよ。顔に塗ってある泥が落ちちまう心配がないからね。外にお前に見せておきたいものがあるから、さっさと起きてあたしの後を付いておいで」



キンナラは風穴の出口に向かいながら、続けて言いました。

「まだ寝ぼけてるようだから先に行くよ。行く先は、地面にめりこんだあたしの足跡で、ちゃんと分かるだろうからね。昨夜の大雨のせいで外はドロドロだよ」

そのキンナラの命令は忠実に守られたとみえて、起きて風穴から出て行ったイドの足跡は、まもなくキンナラがつけた最後の足跡に重なるうとしていました。

そこにキンナラ自身の姿は見えませんが、目の前には洞窟が口を開いています。老婆の足は、どうやらその洞窟に吸い込まれたようでした。

「こりゃ、かなり広そうだな」

そう言いながら洞窟に入ると、キンナラの声と、老婆が手にしているらしい松明の炎が、同時に認められました。

「やっと来たね、イド。で、さっそく本題だ。この洞窟はそう深いものじゃないけど、入り口のあたりが広場状になっていて、作戦の準備をするのにお誂えむきの広さを持ってるんだよ」

「作戦の準備？」

察しが悪いイドに、キンナラが呆れるようにして言いました。言いながら、妙な動作で洞窟の内壁をまさぐります。

「巨人を倒すための作戦、そして、その準備に決まってるだろう。その分じゃ、夜な夜なあたしが風穴を抜け出しては、ここに来てたつていうのも知らないだろうね」

「悪かったな……」

イドがさらに何かを言い足そうとしましたが、その時、丸みをおびた洞窟内を巡るように、何本かの松明が順次燃え上がりました。自動で発火するような装置を作っておいたらしく、先ほどキンナラがまさぐっていたのも、どうやらその装置の一部だったようです。これにより、一気に洞窟内が明るくなりました。

突如明るみに出された洞窟内の様子に、イドが驚きのあまり叫び声を上げようとして、それがままたらず、逆に絶句してしまいました。

「……」

広い洞窟内には、無数とも思える「人の形をした泥」が転がっています。言わば「泥人形」といったものが、松明に照らされた空間一杯に並んでいるのです。

一つだけでも気味が悪いでしょうに、全部を合わせたら、それが百体もあるでしょうか。本当に、一つ残らず人型をした泥なのです。

しかし、イドを驚かせたのはその事であっても、イドを絶句させたのはその事ではありませんでした。これ以上に衝撃的なものが彼の目に映ったのです。すなわち、洞窟の奥のほうでは、その泥人形が勝手に自分の手足を動かし、傍らにある泥をこねて、新しい泥人形を作りだしていたのです。

泥が泥を捏ねるといいうのも奇怪ですが、暗がりでごめく彼らの肢体は、表面を潤す水分によって妙に艶やかに光っており、その冷たい肌の質感といたら、まるで海蛇のようにおぞましいものでした。

「何だよ、こいつら……何で動いてるんだよ」

「ひひ、そいつを尋ねる前に、まず泥たちの顔を見てごらんよ」

顔だって？ と、キンナラの意向に従ったイドが見たものは、彼を底なしの驚愕に陥れるに十分なものがありました。

「ど、泥の顔……風穴で暮らしてる男たちの顔とそっくりじゃないか。うわ、見たことがある顔ばかりだ。あれも、これも、それも……泥の一体一体の顔が違っていて、そのうえ、それぞれの顔にソックリな人間がいるなんて、どうなってるんだよ、こいつは」

「つまり分身ってことさ、あいつらのね」

img00808.jpg



と、キンナラはさも嬉しそうに話し始めました。

「この泥人形は、中毒者たちの憎悪が生みだした、奴らの分身なのさ。」

ひひひ、ことの始め、あたしはまず数体の泥人形を作って、その泥人形に、中毒者たちの憎悪が乗り移るようにまじないをかけた。あの巨人たちに対する憎悪が乗り移るための呪文をね」

「巨人て、あのラノ・ララク山に立ってる奴らのことかい？」

「そうさ、中毒者たちの敵意を巨人に向け、さらに、その敵意をいや増すために、苦勞して芝居の台本まで書いたんだからね。そして、そうやって煽った憎悪を、泥の人形へと乗り移らせたわけだ。」

これによってね、荒い輪郭しか持ってなかった泥人形に、まず、中毒者たちの中でも、もっとも憎悪が激しい奴らの特徴が浮かんできた。つまり、泥人形の顔が、見覚えのある男たちのそれへと変わっていったんだ。こいつは実に見ものだったね。

そして、泥が風穴の男たちにソックリになるにしたがって、泥人形たちは自分で体を動かせるようになっていった」

そうやって体を動かせるようになった泥人形は、さきに見たとおり、今度は自分でも新たな泥人形を作ったのでしょう。泥人形たちは、自らの手によって新しい仲間をつくり出し、その新品の泥人形に、また新たな中毒者たちの顔が宿るのです。

「中毒者たちの顔をした泥人形はどんどん増えていった。面白かったねえ、あたしがこの洞窟を訪れるたびに泥人形の数が増えて、毎回新顔に会うことになるのはさ」

そう言うキンナラの嬉しそうな様子とは対照的に、イドが引きつった声で尋ねました。

「あんたは魔法使いなのか……こんな事ができるなんて」

「魔法使いはいいね、恰好いいね。だが、そいつはちょっと荷が重い。なぜなら、あたしの呪力は、あのアトラスに対してのみ発揮できる、ひどく限定されたものなんだからね」

「アトラス？」

「あの巨人のことさ。ご主人様から色々と教えてもらったんでね。名前ぐらいはとうの昔から知ってるのさ」

「婆さんの力は、そのアトラスにしか使えないってことか」

そうさ、と語りだしたキンナラの口調には、僅かに哲学者的な威厳のようなものが漂っていました。

「自然は自然によって自然になり、不自然は不自然によって自然になろうとする。分かるかい、結局、世の中には自然なものしかありえないんだよ」

「は、はあ？」

「あの巨人は、見てのとおりで、この世のなかにあって『不自然この上もないような存在』だ。まったく。けど、まあ実際にいるもんは仕方がない。」

ただ自然はね、奴がいることを許容するために、奴を打ち消すような力が生まれることをも許容した。つまり不自然が自然になるためにはね、不自然を打ち消すための、別の不自然を作る必要があったんだよ。その『打ち消しの不自然』が、この呪力であり、この泥人形なんだよ。お前には難しすぎるかい？」

第7章 デイエス・イレ（怒りの日）

（1）滅亡の序幕

洞窟内での会話は続き、キンナラがイドに語ります。

「とにかく、あの巨人さえ倒しちまえばいいんだ。そうすりゃ砦の勢力は消えたも同然。あたしたちを邪魔だてする奴は誰もいなくなる。」

だからイド、その時には、お前の復讐だって、簡単に実現できるようになるんだよ。島人全員を血祭りに上げる事だってできる。嬉しいかい、ねえ？

まあ、作戦実行までには、ちよつとばかり『待ち』が必要になるだろうけどね、なあに、きつとすぐに機会はやって来るはずさ」

と、今日は、とりあえず作戦の下見ということなので、キンナラとイドは、それほど長居せずに、この泥人形で満ち満ちた洞窟を離れました。

そうして住処である風穴に向かって歩いていたのですが、もう少しで風穴に到着というところで、二人の面前にある若者が飛び出してきました。息を切らせた彼は、どうやら長いことキンナラとマゴラーを探し回っていたらしく、二人の顔を見たたん、肩から力が抜けたような様子でした。

「よかった、見つかって……ハア、本当に」

その若者は、若者といっても、ほとんど中年のように見えます。顔が不自然にやせて青ざめているからです。もちろんデルフィーを常用しているために、そのようになってしまったのです。

ただし、その症状の度合いは、今も風穴にいるはずの男たちよりは、まだしもマシでした。彼は名をタントリといい、実を言えば、以前にイドと関わりがあった者でした。

そのタントリが荒い息をつきながら言います。

「キンナラさま、マゴラーさま……ご承知のとおり、私は、砦の付近で巫女たちの動静を探っている者です。ええ、斥候のタントリです。で、実はですね、昨夜おそくに、巫女と勇者とが、船に乗って島を離れるのを目撃したんです。」

そのうえ、二人は朝になっても砦に帰ってきておりません。昨夜の、あの暴風雨ですからね、死んだか、さもなくば波に流されたのでしょうか。何にせよ、いまだ海上らしいんです」

ということは、と、マゴラーが小さく呟きました。

「決シテ島を離れてはなラナイはずの巫女が、今は島ニいないというコトか」

「はい、いないんです。巫女も勇者も」

巫女たちに大きな変化があれば即座に報せるようにと命じられていたタントリは、この重大事を抱えながら、息も絶え絶えになるほど、必死になってキンナラたちの居場所を探していました。朝早くからずっとです。

貴重な情報をいち早く報告できたなら、その重要度に見合っただけの量のデルフィーを貰える約束だったからです。つまり、

「巫女と勇者が島にいない。これほどの重要情報なら、それこそデルフィーを好きにだけ貰えそうだな」と。ところで、覚えているでしょうか。このタントリは、かつて開かれたタンガナの参加者であり、またモツ・ヌイにおけるイドの不正を、周囲に露顕させた者でした。誰よりも先にイドを卑怯者だと嘲ったのも彼です。

しかし、行方不明になったイドに対する同情心が島中で高まるにつれ、彼は立場上、肩身の狭い思いをしなければならなくなりました。そのため結局は、イドと同じように、島民たちから身を隠すことになったのです。

しばらくは一人で放浪していたタントリですが、やがてデルフィーという薬に出会い、キンナラが集わせた共同体にも出会いました。そして彼は、迷うことなく、その共同体に身を寄せることにしたのです。

さて、巫女が島にいないと知ったキンナラの喜びようは、なぜか大変なもので、たとえ威厳を失っても、この笑いばかりは止められないといった様子です。

「ひひひ、この雨が止んだ日に、巫女は島にいない。最高だ。まったくスゴイよ。こんなにも早く機会が巡ってくるとはね。もう『待つ』必要なんざない。

タントリとか言ったね。お前さん、ラノ・アロイ山の近くに島の連中を集めな。あたしに考えがあるんだ。島の奴らは、巫女が招集をかけたとしても言やあ素直に集まるだろう。そのウソに『あたしは言っていない』と文句を言うべき巫女は、今ごろ何も知らずに海の上だしね。とにかく急ぎなよ。

イド、お前は風穴の男たちを同じ場所に連れてきな。もちろん急ぐんだよ」

老婆が不用意に言い放った言葉を聞いて、タントリがよくよく穿った目で、本当はイドであるマゴラーを見つめました。

「イド？ イドっていったら……」

マゴラーが慌ててそっぽを向くと、浮かれていたキンナラも、自分の失言を誤魔化そうとして、要領を得ぬままに前言をひるがえしました。

「イドだって？ イドだなんて言ってやしないよ。いそ『イデ』って、そう、急いでって言ったんだ。まったく、細かいことを気にしなさんな。タントリ、でないと口に入るデルフィーの量が減っちゃうよ」
こう脅かされたため、タントリは腑に落ちないものを残しながらも、速やかにその場を去っていきました。もちろん、命じられた人集めに奔走するのです。なんといっても、デルフィーの快樂に比べれば、イドも「いそイデ」も大した違いではありませんから。

そして、期せずして冷や汗をかかされる事になったイドも、タントリが走り去るのを確かめると、キンナラを一睨みしたのち、憤りを抑えながら風穴に戻っていきました。

（気をつけるクソ婆アめ！）

残されたキンナラは、少しだけ気まずそうに黙っていましたが、そのうち苦笑を浮かべながら独り言ちました。

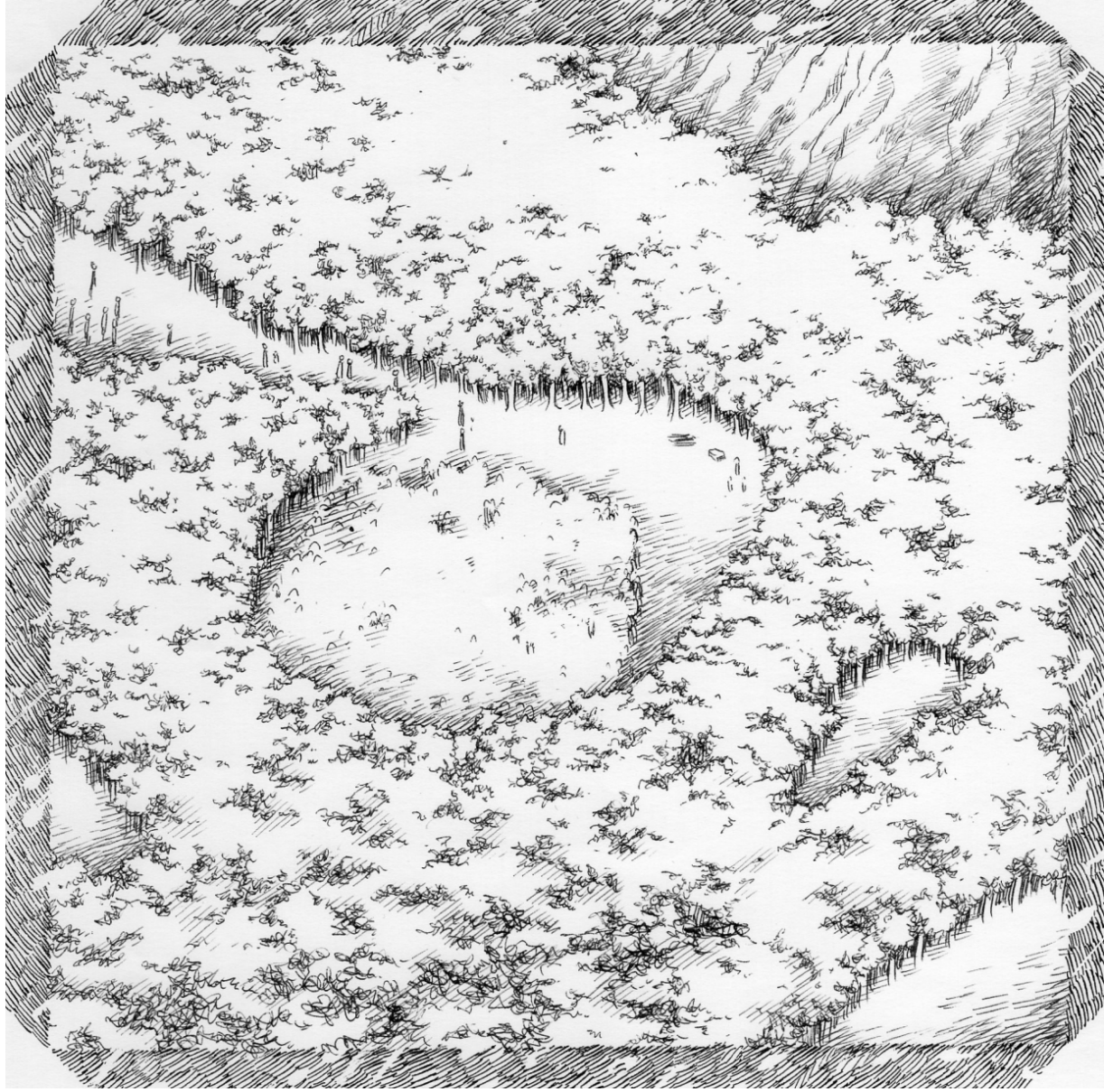


2023.05.01(2).png

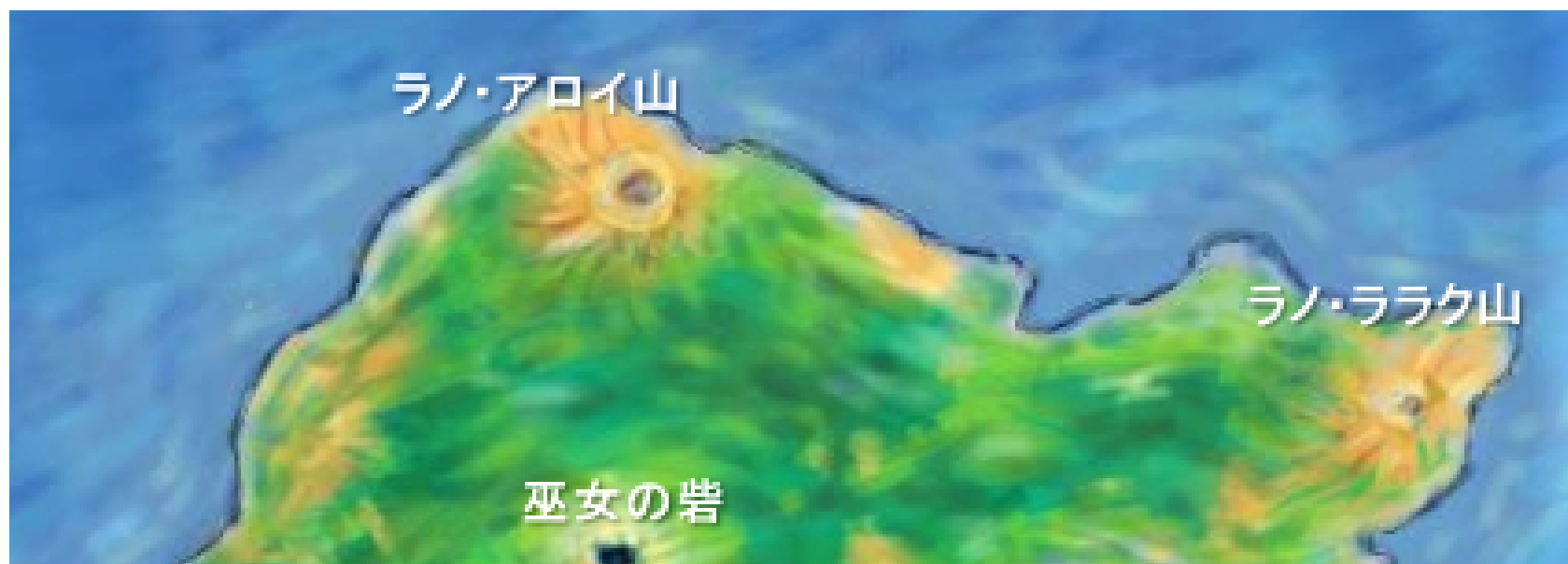
「気にすることはないさ、イド。だってお前は、すべての罪を背負って、もうすぐ死んでゆくんだからね。魔の力は、お前の命を担保にして与えられたもの。願いが叶えば、命という対価を払わなければならない。ひひひ……生贄はほふられるのさ」

タントリによる——無論、それがタントリによるものだとは誰一人気づきませんでした——「巫女が招集をかけている」という呼びかけによって、島民の総勢に近い、相当数の人々が、ラノ・アロイ山麓にある広場へと集いました。島における巫女の信望の厚みが表れた状況と言えるでしょう。

img0085.jpg



しかし、巫女チェリアは、島民の負担を考えて、つねに、自分から村落に訪れて説話を行っていたのであり、民たちの生活リズムを無視してまで、強引に彼らを定位置に召集することは、これまで一度もありませんでした。



そのため、島人たちは素直に広場に集まってはみたものの、

「変だな。何だって、いつものように村に遊説しに来るのではなく、こんな風に俺たちをかき集めたんだろうか。よりによって、こんなにも閑散とした、多くの村人にとって、決して家から近いとは言えない場所に」

という疑問にかられている者は多いらしく、不可解そうに傾げられた首がいくつも見られました。

そして、そうした者たちのざわめきが声高になった頃、民たちの面前に設けられた台上に、とうとう一人の人物が昇りました。もちろんキンナラその人です。

「違う、巫女じゃない！　なんだ、あの薄汚いババアは！」

キンナラの登場に際して、集まった者のほとんどが、この類の声を上げました。また、

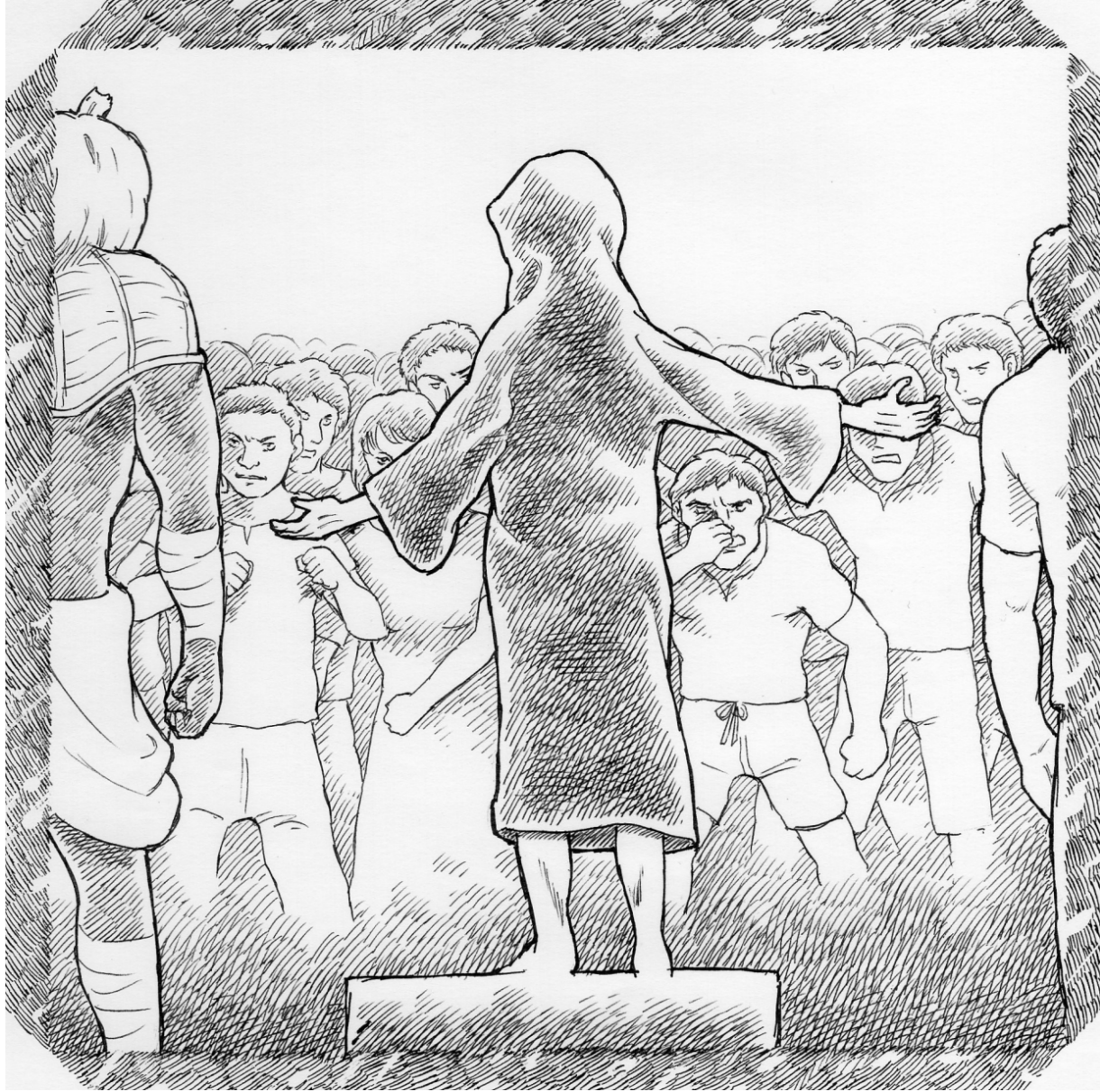
「あいつだ。あいつが島を、この俺の体をこんなにしやがったんだ。あいつが変な薬を配ったから、島にあれほどの災厄が起こったんだ！　奴め、たしかキンナラという名前だったぞ」

といった切実な声も上がり、方々から「そうだ、そうだ」と、その声が励まされました。

「お前が現れたということは、つまり巫女の招集ってのも嘘っぱちなんだな。俺たちを騙してタダで済むと思ってるのか！」

人々の中には、キンナラに向かって、石を投げつける者もいます。誰もが険悪な目でキンナラを睨み、その口からは怒りの言葉が次々と吐き出されました。

img086.jpg



しかし、そうした誹謗の声が大合唱になりかけた時、それまで沈黙を守っていたキンナラが、厳しく叫ぶような声を出して、周囲の空気をつんぎました、

「いい加減にお黙りよ！」と。

「ああ、今日騙したのは悪かったよ。本当に悪かった。あたしとしても心苦しくは思ってるんだよ。あたしは嘘をつくのが大っキライなんだからね。

だけど、あたしあねえ、お前さんたちが気の毒だから現れたんだよ。可哀そうで見えられなくて……だからお前さんたちを呼んだんだ。あたしが出てくりゃ石ぐらい投げつけられる、そんなのは察しがついてたよ。けど、それを覚悟して出てきたんだ。他でもない、あんたたちのことを哀れに思ってたよ」

「巫女の名を騙った時点で大罪だっていうのに、お前は嘘に嘘を重ねて、罪に罪を重ねて、さらに重い罪状を望もうって訳か。何だったら、いま死刑にしてもいいんだぞ」

そのような言葉を浴びても、キンナラは、一向にこたえていない様子です。

「巫女か。まったく、巫女、それからあのバカでかいバケモノに騙されてるお前たちが気の毒でならんいよ。騙されているからこそ、あたしに向かって酷いことが言えるんだ。そんなにも見事に偽善者に操られるなんて、ああ、なんて哀れな！」

老婆の憐れみに対して、島民たちが怒りを噴き上げるようにして叫びました。

「ふざけるな、血迷いやがって！ チェリアさまが、いや、島の巫女の血統が、島民を騙すことなどあるものか。巫女は、島民のために全てを投げだして尽くす。あの方は、言葉をこえ、行動でそれを証明なされた。お前の薄っぺらな口車とはまるで違うんだよ。そんな巫女が俺たちを騙すわけあるもんか！」

こうした信仰告白を耳にしたキンナラは、信じる気持ちを挫くにはもってこいの嘲笑、卑怯な高笑いによって相手の勢いを封じました。

「巫女がお前たちのために尽くす？ 馬鹿を言っちゃいけない。それだからこそ騙されてるというんだ。お前たちが気づかないだけで、あんなにも心の汚い女はいないんだよ。

巫女の内心には、恐ろしい偽りと、お前たち島民への侮蔑とが渦巻いている。

そう、チェリアは、その本心では、お前らのことを馬鹿にしてるんだからね。

愚にもつかない島民に囲まれた退屈な生活、あの女は、そんな毎日からさっさと逃れたい、ってそう思ってたんだよ。馬鹿どもに囲まれてたんでは、そこで女王きどりをしてても、一向につまらないと言っ
てね」

「い、いい加減にしろよ……このババア。絵空事にしただって、そこまで侮辱されたら許せなくなる」

「絵空事だって？ ふん、証拠が揃ってるのにかい。巫女が島民たちを疎んじていた証拠にね、チェリアは昨夜、勇者と一緒にこの島を逃げていっちゃった。巫女と勇者は、手と手を携えて船に乗り込み、そうして昨夜、島を離れちゃったのさ。

何だったら調べてごらん。チェリアもアサジも、どこにもいないからさ。巫女の立場上、島から逃げ
るなんてこと、ちょっとでも島民に勘づかれちゃ困るからねえ。今まで熱心に尽くしていたのは、お前
さんたちを油断させるための狂言だったんだよ」

こう言われて、またもや人々のあいだから反発の言葉が上がりました。
「そんなのは嘘だ！　だいいち、あのアトラスをバケモノだなんて言う奴を信用できるもんか。ババアめ、お前が言っている一切が、狂人の戯言でない証拠を見せてしろ！」

（2）巫女の不在

キンナラは、また嘲笑して言いました。

「アトラスなんて化け物も化け物、とんだ悪魔だよ。あいつらはね、ただ安っぽい恩を売って威張りたいのと、美味しいものが食いたいだけの悪魔なんだよ。」

奴らがこの島に来たのも、つまらない理由からなんだ。つまり、北の大陸の食い物に飽きたっていう、単にそれだけの事情に依ってるんだよ。そんなだから、もし食い物の味に飽きちゃったら、この島からだって、迷わずさっさと離れていっちゃうはずさ」

遠くラノ・ララク山の方角を眺めながら、老婆はその言葉を続けました。

「そりゃ、いまは島を動かないかもしれない。だって、奴ら山のような貢物を貰っているもの。なあ、お前たちが収穫した作物は、みんな化け物のところに運ばれてるって知ってるかい。そんなの、あたしの仲間にとっては周知の事実なんだよ」

このキンナラの話は、もちろん嘘です。あるいは、かのお芝居における虚構です。空で出来ているアトラスがものを食べるはずもなく、そんな彼らに食べ物を貢いでも、何の意味もありません。

しかし、普段ラノ・ララク山を行き来しているのは、チェリアを始めとする砦の人間たちぐらいのもので、一般の島民たちには、アトラスの食料事情など知る由もありませんでした。

「だけど、そこで勘違いするんじゃないよ。」

チェリアにとっては、それだって化け物のためにやってる事じゃない。あの女にとっては、いつだって自分の保身だけが問題なんだ。いいかい、貢ぎ物を献上しておけば化け物は喜ぶし、上機嫌の化け物を見ていりゃ、あたしたち島民だって油断する。油断してりゃこそ、今回そうであるように簡単に島を抜け出せるって訳で、ね、これまであった事は、残らず巫女と化け物が仕組んだ茶番だったって事なんだ」

「な、お前さんたちが可哀そう、気の毒だったのが理解できるだろう。そして、自分たちの愚かしさが身に沁みてるはずだ。あたしの言葉を無視できなくなるぐらいにね」

さっきまであれほど気炎を上げていた人々も、こうなると、とうとう黙らざるを得なくなってしまう。キンナラの話をそのまま受け入れることは出来ませんが、今までの出来事を、キンナラが言ったように解釈することも、また出来ない事ではないからです。

そして、その疑念に追い打ちをかけるようにして、

「巫女たちが、本当に島にいないらしい」

と、押し黙っていた群衆の一人が呟きました。その言葉は伝染病のように人々の耳に行きわたり、その範囲を広げることには不安な空気を醸成していきます。

ざわめきが人々の不安を物語っていましたが、実は最初に「巫女たちが島にいない」と呟いたのは、キンナラにその情報を伝えた、あのタントリでした。彼は早くから群衆のなかに紛れ込み、あわよくば人々の不信に火をつけようと機会を見計らっていたのです。そして、その成果はまさに上々だと言えました。

島民たちの「巫女への信仰の揺らぎ」を読みとり、すかさずキンナラが言い放ちます。

「お前たち、島に妙な病気が流行っているのは知っているだろう。巫女が何と言ったかは知らないが、あの病気が流行りだしたのは、あの巨人、化け物どもがこの島に来てからだ。確かにそれまでは無かった病気だったんだ。

なあ、化け物どもが来るまで病気はなかったんだよ。

だとしたら、チェリアが、島人たちを弱らせて、自分が速やかに島からズラかれるよう、あの化け物に病気を流行らせてもらったとは考えられないか。あの化け物だったら、きっとそれぐらいの事は出来るだろうし、お前たちを残して島から逃げ出すような女なら、それぐらいの事は企てられるはずさ」

「そんな……まさかチェリアさまが、そんな事までも……」

民たちの動揺は、もはや完全に心の拠りどころを失って極限に達しようとしていました。

「はじめに言ったように、あたしあ、お前たちが気の毒だからここに来た。

言いかえれば、お前さんたちを救いに来たんだ。化け物と巫女が強要した苦しみから、このあたしが助けてやろうって言うんだよ。だから、あたしは自分が救い主であることの証明として、あの病気の餌食となった者を治してやる。巫女が捨てていった病人を治したならば、この老いぼれの誠意も少しは伝わってくれるだろうからね」

そう言うキンナラは、デルフィーを入れた器を持ちながら、群衆のなかに分け入っていききました。そうして老婆は、その群衆の中に一人の病人を見つけます。もちろん「あの病気」の患者であり、その表情は絶えまない苦痛に歪んでいました。

そしてキンナラは、半ば強引に、その病人の口にデルフィーを流し込みました。

「みんな、よく見るんだ。こいつを飲めば、どんな病気だって即座に治っちゃう」

そして、このキンナラの言葉どおり、広場に集まった人々は、今しがたまで苦痛に顔を歪めていた男が、急に笑顔になるのを見ることがになりました。さきほどまで病人だった男が、いまや、さも気持ちよさそうに、恍惚として笑っているのです。

「痛みが消えた……いや、いまは天国にいるような心地だ」

A black and white woodcut-style illustration depicting a crowded, distressed scene. In the foreground, a woman with a shocked expression looks up at a man who is being held back by another person. In the background, a man in a hooded cloak is being restrained by others, while a woman in the center looks on with a pained expression. The scene is filled with many other figures, suggesting a large, chaotic gathering.



島民たちにとって、それはまさに驚愕すべき光景でした。

「巫女は何もしてやれなかったのに、キンナラは、この男をアッサリと救っちまった……」
と誰かが呟きます。

ですが、もともと「デルフィー切れによる禁断症状」が患者の苦しみの原因だったのですから、再びデルフィーを飲むことによって、患者の痛みが除かれることなど、病理上まったく当たり前のことなのです。

しかも、このような一時的な治療と快感とが、やがて再来する苦痛の前置にしか過ぎないことは言うまでもありません。

しかし今は、理屈よりも、その場の勢いの方が、はるかに大きな意味を持っていたようです。不治と思われていた病気が一瞬にして治ったのを見ると、群衆のあいだで、まずその薬を賛美する声があり、続けざま、薬の持ち主であるキンナラへを支持する歓声が沸き上がりました。これに伴って、巫女への不信も極限まで達し、

「島の巫女は、上っ面の誠実さで俺たちを騙してたんだ！」

「俺たちは欺かれていた。キンナラさまこそが、真に島を救ってくれるんだ」

といった言葉が人々の口に登りました。信じていた人から裏切られる事ほど辛いものではありませんから、民たちがこのようになるのも、至極もつともなのかもしれません。

ところが、その民たちに向かって叫ぶ者がありました。

「静まれ！ そんな者の言葉に心を奪われてはならぬ。どんな事があるうとも、お前たちが仰ぐべきは島の巫女だけなのだ！」

その声の主は、砦の従者たちに囲まれたバッティーヤでした。探索中のキンナラが出現、という通報を受けたバッティーヤが、たった今ここに到着したのです。

ただし、通報者が見たのは「キンナラ出現」の場面までだったので、その通報を受けたバッティーヤも、（どんなに探しても見つけれなかった薬売りが、今になって自ら姿を現わしてくるとは。よし、わしが行って、今日こそ奴を捕らえようぞ）

という気持ちでいたのです。ですが、お分かりのとおり、この時ばかりは、まんまとその思惑がはずれてしまいました。

（どうしたのだ、この冷やかな民たちの様子は）

と、バッティーヤが広場に到着した時には、すでにキンナラへの歓声が沸き立っており、それを戒めたバッティーヤは、逆に、民たちから敵意を向けられることになったのです。

しかもバッティーヤは、群衆たちから、さらに思いがけない質問を突きつけられることになりました。すなわち、

「バッティーヤ、本当に巫女は島にいないのか」と。

ぞんざいな言葉づかいもさることながら、内容自体、バッティーヤを心底から困惑させずにはおかない質問でした。



今チェリアは海上にあります。病人を救うための薬、サンゴの卵を手に入れるためです。しかし、巫女の第一律からすれば、民を救うためとはいえ、チェリアが海に出たことは、まさしく掟と民に対する裏切り行為に他なりませんでした。巫女の第一律とは、

「巫女が島を離れば、その時には巫女に、そうでなければ巫女不在の島に、必ずや大きな災厄が降りかかるだろう」

という事を意味していたからです。これを冒せば、形式上、巫女が島民を裏切ったことになるのは当然のことです。

ですから「巫女は島にいないのか」という問いは、バツティーヤにとって、絶望的なまでに答える術のないものだったのです。

そして、そうやって質問に答えられないバツティーヤを見たことは、群衆にとって、自分たちが進むべき道がどこにあるかを明示されたも同然のことでした。

「答えられないということは、巫女は本当に俺たち島民を見捨てたんだ。俺たちが信じるべきなのは、やっぱりキンナラさまなんだ！」

殺気をはらんだ島人たちを前に、バツティーヤは何も言えず、また何も為せぬまま、踵を返して逃げ出すしかありませんでした。少なくとも、ここに留まっていれば命の保証はありません。

広場を離れ去っていくバツティーヤ一行を横目に、キンナラが意地悪くほくそ笑みました。

（あんな馬鹿もいるんだねえ。あのジジイったら、火を消すつもりでやってきたのに、見事に火に油を注いでくれたもの。まったく何しに来たんだか、ひひひ）

そして老婆が、島民たちに対して一層の威厳を示しながら宣誓します。

「見な、砦の人間は逃げていっちゃった。それこそが、奴らが島民を騙していた証拠だよ。

残されたお前たちは実に可哀そうな立場にあるが、だからこそ、あたしがお前たちを救ってやる。あたしの言うことを聞けば間違いないから心配するな。これは新しい、そして素晴らしい関係の現出なんだ。だから、祝杯にあの薬をやろう。さっき病人を救った万能薬だ。飲めば、お前たち全員が幸せになることを約束してやるよ」

その言葉に、人々は何一つ疑いもせずデルフィーを飲み、誰もがその快楽に打ち震えました。そして、その快楽のために人々の頭が判然としなくなったところを見計らい、キンナラが催眠術師的ないかがわしさでもって言います。

「天が落ちてくるなんて話は全部ウソだ。

あれは、天の底をアトラスが引っ張ったせいで起こったことさ。あの化け物たちは、以前から島の近くに隠れていて、あたしたちが苦しんでるのを、そこで、じっと伺ってやがったのさ。自分が島の救い主として現れるための、その絶妙の機会を逃さないためにね。

だからね、お前たちが苦しんだのも、テピト・テアナが減びかかったのも、すべてはアトラスとチェリアのせいなんだ」

ならば島の救いは、罪惡を犯した者たちへの制裁にこそある、とそうキンナラが、今度は尊大な口ぶりで民たちに命じました。

「巫女はいないが、アトラスたちはまだ島にいる。だから奴らを呪い殺してやろうじゃないか。いいかい、みんな輪になれ。太鼓を鳴らして火を燃やせ。そして唱えよ、アトラス憎しと。アトラス憎しと！」このキンナラの音頭が、やがて群衆たちの大合唱となったときのことです。

その巨大な憎惡の念によって、かの洞窟から泥人形が這いだし、それらが一様にラノ・ラク山に向かっていきました。もちろんアトラスを倒すためにです。

それだけではありません。さらに、広場でアトラスを呪っている者たちの人数分だけ、洞窟のなかでは、続々と新しい泥人形が量産されていたのです。そして、それら新しい泥人形が、間断なく洞窟から出ていつては、ラノ・ラク山への行軍に加わるのです。

それはまるで、うごめく闇が、光を呑み込みながら、アトラスたちのもとへと忍び寄るようでもありました。

（3）昨夜、嵐の夜のこと

昨夜、嵐の夜のことです。

この夜バッテリーヤの家を訪れたアサジは「サンゴの卵を採りにいくための船」を用意したことをチェリアに伝えました。父母やアサジの過去を知ったことで気が動転しているチェリアにです。ですが、そのときアサジは、

「いつでも出発することが出来ますが、それほどの早急さを必要とする事でもないでしょうから、とりあえず風が止むのを待ちましょう」といったことを付言しました。

いくら麻薬の禁断症状で苦しんでいる病人がいるといっても、その症状は慢性的であり、死との関わり合いで言えば、今すぐどうこうなるという話ではありません。

これに加えて、外では強風と大雨が吹きすさんでおり、船を扱うにはあまりにも危険な状況となっています。風雨が止んだ時とまでは言いませんが、ある程度天候が落ち着いてから船を出すことが良策でした。

「とりあえず風が止むのを待ちましょう」

そう言ったアサジは、分かりきったチェリアの返答、つまり「ええ、そうですね」という言葉を待ちました。チェリアも島国に生まれた人間ですから、今夜海に出ることの危険性が分らないはずはありません。

ところが、チェリアはなんとアサジの言葉を拒みます。

「い……いえ、いますぐ出発しましょう。巫女が島から出てゆくところを誰かに見られたら、それこそ

大変ですから。今夜のような嵐なら、誰も外を出歩いていないでしょうから、私たちが海に出ていくには都合がいいはずですよ」

その言葉に、アサジよりもバットーヤのほうが驚いてしまいました。

「何を言うのだ！　今から海に出るなんて、あたら大事な命を捨てにいくようなもんじゃ。島で一番の舵取りと言われたコースタニヤでさえも、嵐の海には勝てなかった。まして操舵技術に問題のあるアサジにおいてや、だ。危険すぎる。チェリア、馬鹿なことには言わずに、風雨がおさまるのを待つんじゃ」

ですが、チェリアは、バットーヤの訴えに耳を貸そうともせず、固く押し黙ったまま、単身で祖父の家を出ていってしまいます。アサジもこれには慌てふためき、啞然としている老人に短く言うと、息もつかぬ勢いでチェリアを追いかけてきました。

「バットーヤさま、何とかしてチェリアさまの足を止めるつもりですが、万一どうにもならなかったら、そのまま海に出るかもしれません。巫女を制止するような権限は、私には与えられていないからです。少し経っても、私たちが帰ってこなかったら、そのつもりでいてください」

そう告げるとアサジの手によって、ドタンと、手荒く戸口が閉じられました。



「待ってください、チェリアさま。私たちが海上で死んでしまったら、本当に島中の人々が悲嘆に暮れることになるのですよ。あなたの帰りを待ちわびている病人たちはどうなるのです。あなたが生きて戻らなかったら、彼らは、これからもずっと苦しみ続けなければならないのですよ。そうなくても良いのですか、チェリアさま！」

打ちつける風雨のために喋りづらそうにしながらも、路上、アサジが必死に説得を繰り返します。しかし、チェリアは一向に彼の言葉を聞こうとせず、のらりくらりと、話の焦点をずらすような言葉ばかりを返していました。

「風の音が、いまは患者たちの叫び声のように聞こえるのです。はやく患者たちを助けてあげなければ……そんな願いが私を走らせるのです」

そして、実をむすぶことのない問答が繰り返されるうち、二人はどうとう船着場まで辿り着いてしまいました。まさしく、そこは七年前、セフィーネとコースタニヤが出航したのと同じ場所でした。

それにしても、海は陸地以上の強風に晒されており、その波の高さは尋常異常の騒ぎではありません。さすがのアサジも生唾を呑み込みましたが、それは先ほど船を用意したとき以上の高波であり、後ずさりしたくなるほどの大時化でした。

「アサジさんが用意なさった船というのは、あれですね」

海を目前にしたこの時も、アサジは何か出発を取りやめるようにと進言したのですが、チェリアは、その言葉にも耳を貸さないまま船に乗り込んでしまします。

こうなっては今さら出航しない訳にもいかず、アサジも大きく揺れる船に乗り込むと、その後方に仁王立ちとなりました。波に浚われないよう、腰に縛りつけた縄を船尾に結わえつけます。波の高さを見るかぎり、そんな事をしても、まじないぐらいにしかなりそうにありませんでしたが。

アサジが用意した船には、板敷きの下に、人二人ぐらいが入れるだけの空間がありました。いわゆる船底の空間です。船の前のほうに、そこへ入るための穴が開いています。備えつけの蓋がないところから見て、普段はここに、漁で獲った魚を入れておくらしいのが分かります。

チェリアは少しも躊躇わずにここに入りましたが、魚を入れておく場所にしては意外と生臭くありません。ただ波のせいで生じる揺れがひどく、この中で長い時間を過ごすのは、相当の苦行になりそうです。

ですが、そのような最悪の航海が予想されるのにも関わらず、チェリアは、四角い船底への入り口から無表情な顔を出して、

「アサジさん、私は平気ですから、すぐに船を出してください」

そう、少しも落ち着きを失うことなく命じることができました。

しかし、それは決して固い意志によって言えた事でもなければ、雄々しい勇氣によって言えた事でもありません。こうして臆することなくチェリアが言えたのは、

「もうどうなってもいい。死んでしまっても構わない」

という投げやりな気持ちがあつての事だったのです。

（私はこんなにもアサジさんが好き。）

でも彼は違う。彼が興味を持っているのは、私ではなく、私の両親なのなもの。

彼の関心ごとは、私の両親への償いであって、私は……チェリアという女は、彼にとっては償いを行うための道具にすぎない。そう、彼の心の中には、チェリアへの愛情はない。ただ先代の巫女夫婦の遺児を守らなければならないという、そういう強い義務感があるだけなんだわ）

船着場までの道のり、チェリアは、ずっとそのように思っていました。そのように思って、そして……心のなかで泣き続けていました。

（私の心の支えは、いつだって『私には、私を心から愛してくれている人がいる。いつでも私を愛してくれているアサジさんがいる』ということだった。

なのに私は、その当のアサジさんの言葉によって、心の支えを奪われてしまったんだわ。そして支えを失った私は……いま自分の心が崩れていくのを、もうどうしようもない）

そうして心が崩れたとき、彼女の胸に生じたものがありました。それは一種の虚無感です。自分の存在に何の意味も感じられなくなるような、そうした乾いた絶望が、チェリアの胸に生まれてきたのです。自分の存在を虚しく感じているチェリアにとっては、その身を危険に晒すことなど全く平気でした。まして嵐の海など、肘をつままれるほどの痛痒も感じられはしませんでした。チェリアにとっての「自分」とは、まさに、

「もうどうなってもいい自分」であり、「死んでしまっても構わない自分」以外の何者でもなかったのです。

すでに船と船着場をつないでいた綱は切り離され、船は、大波に揉まれながら遙かな沖合へと達していました。船に慣れていないチェリアに容赦なく大きな揺れが襲いかかり、船中に横たわっている彼女に猛烈な吐き気を催させます。

しかし、長いこと大揺れに苦しんだ果てに、何かしら感じるものがあつたとみえて、チェリアは、口もとを押さえながら船底から顔を出しました。船上で舵を取っていたアサジもそれに気づきます。

「チェリアさま、そろそろ目的地近くの海域に達したはずです。」

どうか巫女の力によって、どこに『見えない柱』があるのかを見て、その見えた場所に私を誘導してください。情けないことを言っただけ申し訳ありませんが、なにぶん私には柱の影すら見えないのです」

さすがは勇者という感じで、その声の調子からは少しも衰えが感じられません。病み上がりだというのは大したものですね。これにつられるように、気分が優れないチェリアも、出来るだけ大声で、自分たちが進むべき方向をアサジに伝えました。彼女の短い言葉が、的確な方向を示します。

「肩幅のぶんだけ右に！　そう、そこからは真っ直ぐです。波に流されないようにしてください。少しずれました。拳一つ分だけ左に戻してください！」

こうした手間を経たのち、船は目的のサンゴが生息しているという柱の、まさに真ん前に着くことが出来ました。肝心のものが見えないのですから、アサジにとっては、チェリアの指示が正しければ、の話ですが。

「これで何とか……」

危うい瞬間も多々ありましたが、それでも柱の周りにある岩礁に船を固定すると、ホッと一息をついたアサジが、およそ色気のない口調で言いました、

「チェリアさま、すみませんが私の手を握って下さいませんか」と。

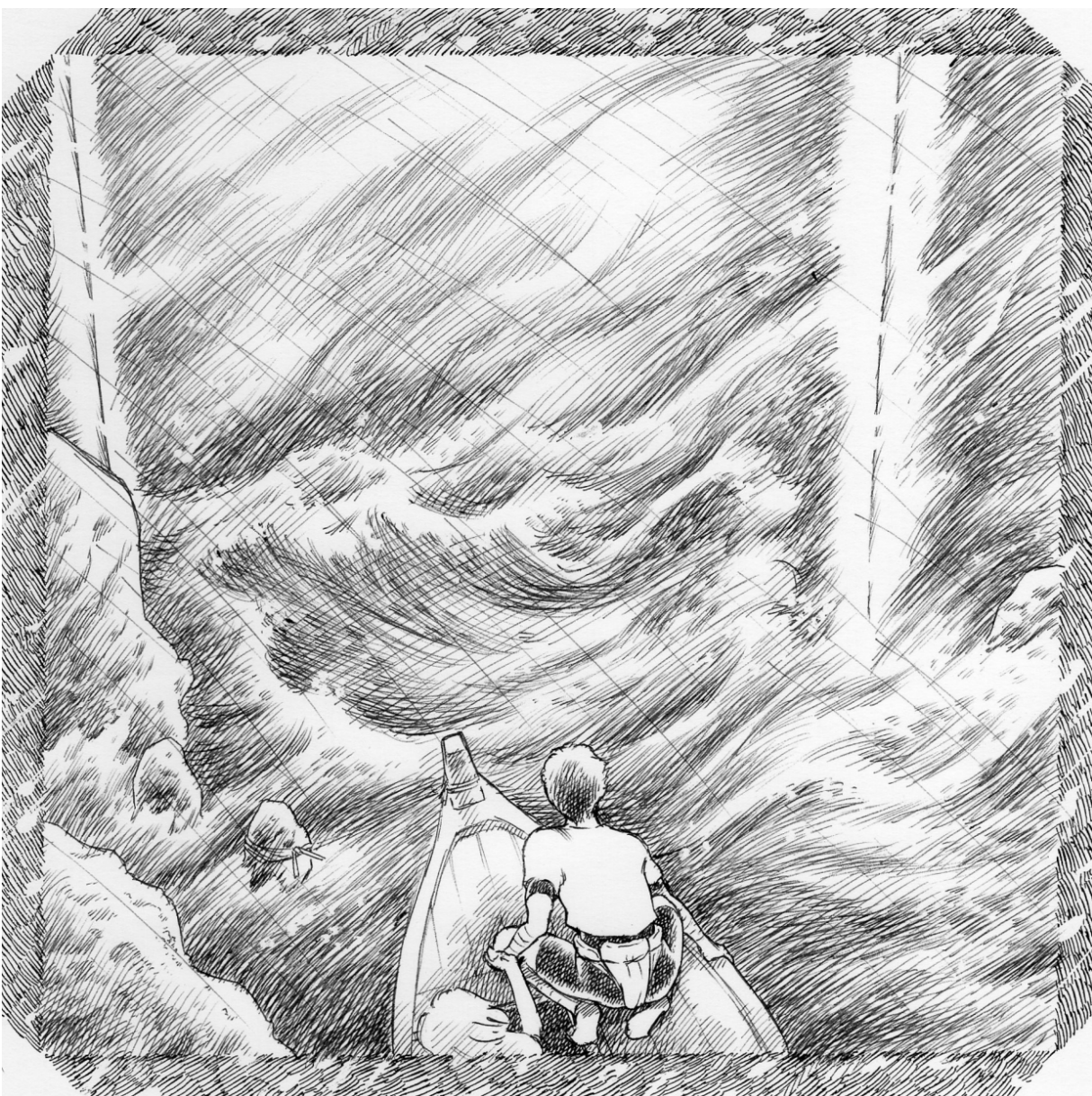
「今のままでは、私には柱がどうしても見えません。」

しかし、巫女の体に触れることで、その力の一端が普通の人間にも流れてくる、そういう話をバッテリーやさまから聞いたことがあります。上手くいけば、この私にも霊眼によって柱が見えることでしょう。このままでは、採るべきサンゴを探すことも出来ないものですから……お願いします、チェリアさま」

アサジが飾り気なしにそう言うので、チェリアも彼にならない、過剰な反応を示すことなく彼の手を握りました。そして、その握ったとたんにアサジが呟きます。

「……見える。だが、こんなにも輝いて見えるなんて……これならば確かに、今夜のような闇夜でも、少しも迷わずにここに辿りつけたはずだ。それにしても、この柱の美しい輝き、とても現実のものとは思えない」

img00900.jpg



そう言ってアサジは、海に己が体を少しずつ浸していきました。

一方、船上に這いだしていたチェリアは、船べりにしがみつき、アサジと結ばれた手を出来るだけ遠く船外に伸ばします。それこそ「これ以上伸ばしたら、もう手が千切れてしまう」というほどにも。ですが、自分の腕の長さの分だけ、アサジの動ける範囲が広がるのですから、それを痛いなどとは言ってもらえません。

「ではチェリアさま、サンゴの卵を採るため、これから完全に海に潜ります。ですから、ご自分の腕が私の命綱なのだと思って、どうか、どうかしっかりと手を握っていてください。この海のあり様では、波に浚われたと同時に命がなくなるも同然ですから」

言われるまま、チェリアがアサジの手を強く握ると、巫女に心配をかけまいというのか、アサジは、一度彼女に優しく笑いかけてから海に潜りました。チェリアには、片手を残してアサジが消えてしまったようにも見えます。

チェリアはそのとき……アサジの命をつないでいる自分の手を見つめながら、泣いていました。油断をしたら大声を上げてしまいそうで、今は、それをせめて小さな嗚咽に抑えておくことだけが、彼女にできる精一杯のことでした。

「どうしてこんなにも……涙が出る……？」

その答えは、自分自身の手が教えてくれました。涙が出るのは、握ったアサジの手の温もりのせい。その温もりが、チェリアの虚無感を溶かしてしまったせいでした。そして、虚無感の向こう側には、ただ純粹な悲しみばかりがあったのです。大好きな人の愛情を失った悲しみ、ただそれだけがあったのです。

とめどなく流れる涙は、横なぐりの雨と一緒にあってチェリアの顔をグシャグシャにし、伝わり続けるアサジの温もりは、彼女の悲嘆をさらに深いものにしていきました。

そのため、ちょうど船上に昇ってきたアサジの、

「チェリアさま、私の右手いっぱいサンゴの卵が握られています。これでチェリアさまの願いが叶うんです。このまま島に帰れば、あの苦痛に悶絶している患者たちを治してやれるんです」

という明るい言葉さえ胸に突き刺さります。

img091.jpg



（私の願いは、ただアサジさんが私を愛してくれることだけ……）

アサジに力のない頷きを与えると、チェリアはサンゴの卵を手にも取ることもなく、すぐに船底に体を滑り込ませました。そんなチェリアの気持ちに分からないアサジは、雨に打たれつつ、サンゴの卵を袋に入れ、そうして船をふたたび荒波に明け渡ししかありません。

その船の揺れに嘔吐を、悲しみに嗚咽を繰り返しながら、チェリアは言葉を囁みしめるように呟きました。

「嵐よ、私の……こんなにも悲しみに満ちた心など、どうかあなたの猛風によって奪ってしまってください。こんな心いらない。こんな悲しい、こんな痛い心なんていらない。こんな心に耐えていたくない！」

（4）朝の静寂

それとも気を失っていたのか、どうやら、そのまま眠ってしまったようです。

チェリアが起きて船底から顔を出すと、周りが明るく、昨夜の嵐が嘘のように波が穏やかになっていました。曇り空ではありませんでしたが、昨夜の大時化を味わった彼女にしてみれば、それでも信じられないような静けさです。まるで別世界を漂っているような気がするほどでした。

（不思議な気持ち……命はないものと思っていたのに、こんなに静かな朝を迎えることが出来るなんて）
天候と一緒に、心の嵐までもが大分収まっているのに気づきます。昨夜、雨のなかで思いきり涙を流したから、というよりは、朝独特の寝ぼけまなこ的な平静さが、チェリアを包んでいたと言ったほうが正確でしょう。そのため彼女は、振り返ってアサジを見ても、

「眠らずにいたのですか」

と普段の調子で声をかけることが出来ました。アサジが頷き、穏やかに答えます。

「ええ、夜が明けるころには風も雨も止みましたので、仮眠ぐらいはと思ったんですけど。でも不思議と眠くならないんですよ」

チェリアは船上に這いだし、アサジの傍らに座りました。アサジは穏やかに海を眺めながら話を続けます。

「昨夜、嵐だというのに今すぐ船を出せと言われた時は、正直言って心底驚きましたよ。でもチェリアさまは、一刻も早く病人たちを助けてあげたかったのでしょうね。深い慈しみゆえに、そうせずにはいられなかったのでしょうか。」

なのに……私は昨夜『どうして今すぐ出発なんだ』と思った、そんな自分が恥ずかしくなりません。勇者たるものが、いざというときに巫女を不信の目で眺めるなんて……私は、自分の器の小ささに腹立ちすら感じます」

そうアサジが悔いるのを聞くと、チェリアにはかえって辛いものがありました。あの時の自分に、病人たちを慈しむ気持ちなどあっただろうか、と自問すれば、その答えは明らかに否でしたから。

（何ということかを、私は……いえ、私にはどうして自分がこんな無茶をしたのかも分からない。ただ勝手に体が動いてしまっただけ。なんて恐ろしいことなの）

と、今さらながら、背筋が汗ばむのを止められません。

あまりにも大人気なかった昨夜の自分を後悔し、次第に自己嫌悪に落ちこんでゆくチェリアをよそに、アサジは淡々と独白を続けていきました。

「昨夜『必ずチェリアさまを生かして島に帰してみせる』と胸を張って言いましたが、実際に嵐の海を前にして、私は正直ふるえました。その気持ちは分かって頂けますよね。

しかし、チェリアさまの意志は、ただ嵐の海に飛び込むことだけに向いておられた。そして、毅然としたあなたを見ているうち、私は、もはや逃げ出すことなど許されないのだと悟ったんです。それは卑怯なことなのだ、そう分かったんです。だから私は船に乗り込みました。およそ半分は死ぬ気で」

後ろめたさを感じているチェリアにとっては、こうしたアサジの言葉は、チクチクと自分を責めているもののようにも感じられるでしょう。そういった気持ちは、彼女の表情にも表れていましたが、アサジは、それを顧みることなく嬉しそうに続けました。

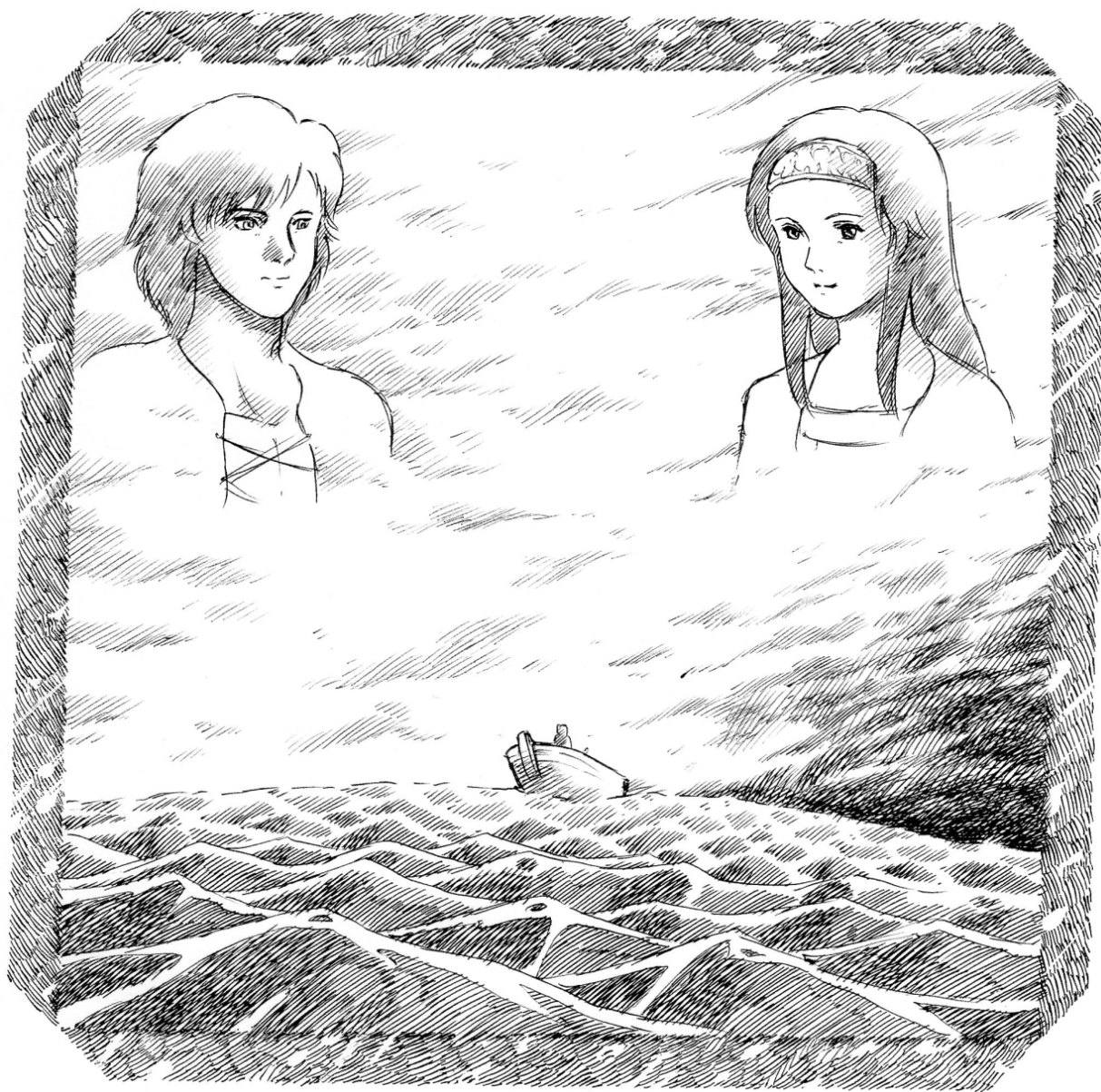
「なのに今、私たちはこうして生きているのですよ。たしかに生きている……

奇跡の朝ともいうべき今、私は無上なまでに嬉しいのです。今となっては、嵐の海に飛び込んでいて、本当に良かったとまで思っています。チェリアさま、それが何故だか分かりますか？」

チェリアが浮かない顔をしながら、首を横に振りました。

「あなたのご両親……逝ってしまったあなた二人は、昨夜、私という人間の誠心確かめるために嵐を起こされた。誠心とはもちろん、お二人のお子さんである、チェリアさまに対する私の誠心です」

「……」



「そして、この私のなかに、自分の弱さを乗りこえ、チェリアさまのために嵐のなかに飛び込んでくれるだけの忠誠心、誠心を見いだせたから、お二人はこのように嵐を消し去ってくれたのだと、私は、そう昨夜からのことを受け取っているんですよ。」

根拠なんてもちろんありませんが、心がそうなのだと感じるんです。そして、それが本当のことだと信じられるから、私はこうして喜ばずにはられないんです」

アサジはそう、顔を紅潮させて雄弁に語りました。本当に嬉しいのでしょうか。少しも曇りのない顔が、彼のスッキリとした心情を鮮明に物語っていました。

しかし、チェリアにしてみれば、こんなにも残酷な、深く胸を抉られるような話はありません。ここにきて再び、

「自分には女としてのチェリアを見る気は毛頭ない。ただ亡くなったご両親への忠誠を尽くすためだけにチェリアを守っている」というアサジの姿勢を明言された訳ですから、わずかな平静から一転、チェリアは再び一途すぎるほどの悲しみへと誘われました。

（私、やっぱり駄目……）

と、思わず、昨夜の激情に引き戻されそうになりましたが、息を目一杯に吸い込むことによって、何とかそれだけは押しとどめました。もっとも、目に滲んでくる涙ばかりは覆い隠すべがなく、アサジに、その悲しい気持ちを見抜かれてしまいました。

「チェリアさま、わ、私、変なことを言いましたね。」

謝れることは全て謝りますから、どうか元氣を出してください。ご両親の仇に慰められても、気が晴れないかもしれません……でも、今日はチェリアさまにとって喜ばしい日なんですよ。お忘れですか、ご自身の誕生日を。十五歳になられましたね。おめでとうございます」

チェリアは、こう言われるまで、自分の誕生日などすっかり忘れていました。ですから指摘されて確かに驚きましたが、嬉しいよりは、胸からさらなる悲しみが湧いてくるのをこそ、彼女にはどうすることも出来ませんでした。

十五歳というのは、テピト・テアナにおける成人の年齢であり、これ以降は結婚も許してもらえます。チェリアの場合、夫はアサジと決まっていますから、早い話が、もういつでもアサジと結婚できるわけです。

その分……つまり、夫婦になることが実感として感じられる分『その夫となる者が、自分のことを愛していない』ということも、実感として重くのしかかって来ざるを得なかったのです。

チェリアは深く沈んだ表情のまま、慰めとも皮肉ともつかない言葉をアサジに与えました。言わずにはいられなかったという様子です。

「アサジさん、ごめんなさいね。あなたは、私の両親の死に責任を感じて勇者となり、今もまた、責任感によって、私の夫となる覚悟をつけているはずですよ。」

人は、もっと自由に誰かを好きになるべきなのに、私は、こうしてあなたの人生を縛りつけてしまいました。何だか、自分の存在が恨めしく思えるぐらいです。本当にどうお詫びしていいか、私としても

何と言っているのか分かりません」

「え……？」

悔しげに震える口もと、寂しさを秘めて翳った眼差し——それらを目の当たりにすることで、いいかげん鈍感だったアサジも、ようやくチェリアの気持ちに飲み込めたらしく、慌てて大声を張り上げました。

「チェリアさま、バツ、馬鹿なことを言わないでください！」

チェリアは、そのタガの外れた声の大きさに驚きましたが、船を揺るがすほどの大声は、それを放った本人にとっても思わぬことだったらしく、アサジは、我に返るやいなや、すぐさま口を手をあてがいました。

恥ずかしさでチェリアを正視できなくなった彼は、そのまま明後日のほうを向いて黙りこんでしまいます。そうやって、しばらくモジモジしていましたが、やがて観念したのか意を決して言いました、

「その美しさを見て、その優しさを知って、あなたを好きにならない人はいないでしょう」

と。そして、またしばらく黙ったあとに、もう一言、

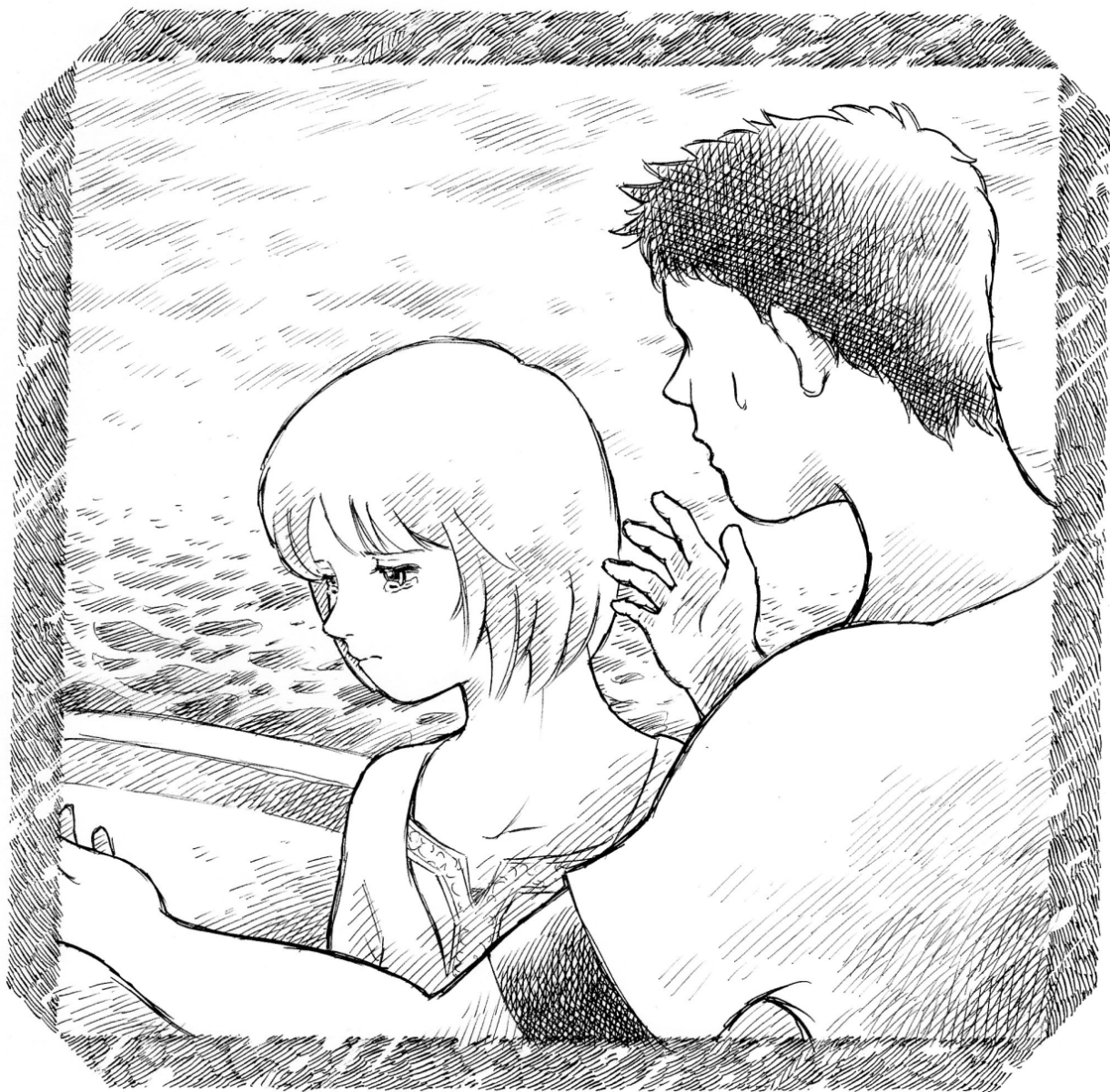
「私も同じです」と。

アサジは、もはや目も当てられないほど真っ赤になっていましたが、チェリアのほうは、ただ訳が分からないような様子でポカンとしています。しかし、ちょっとすると言葉の意味が理解できてきたらしく、その喜びの大きさに、思わず大声を上げて泣き出してしまいました。

そんなチェリアを前にして困るのはアサジです。

どんな苦境にも進んで立ち向かっていく勇者も、女の涙には全く立ち向かう術を知らないようで、情けないかな、本来なら相手を抱きしめるべきこの時に、ただオロオロするだけに終始してしまいました。

いっしょに歩こう



困り果てたアサジが、照れ隠しにか、やけに事務的な口調でもって言います。

「船はずいぶん流されてしまいました。どうか私の体力を信じてください。遅くとも夕方ごろには、きっと島に帰れるものと思います」

ですが、そう言ったところで、チェリアの涙が止まるはずありません。持て余しぎみのアサジは、もはや、いかにも子供じみたあやし方しか出来ませんでした。

「ほら、チェリアさま見てください。たくさん鳥が飛んでいますよ。」

島がある方角から、まるで逃げ去っていくような勢いです。何でしょうね、鳥たちが島から離れるなんて、天の底が近づいてきたとき以来なんじゃありませんか。鳥は事前に危険を察知して逃げると言いますけど、今は、島にアトラスたちがいますものね。また天の底が落ちてくるなんて事は、起こるはずありませんけど……あの、泣かないで見てください。本当に珍しいんですから」

そう言われて、チェリアはやっと手で覆っていた顔を空に向けました。

するとアサジが言ったとおり、一目では数えきれないほどの鳥が、自分たちが帰ろうとしている方角とは、まったく反対の方角に向かって飛び急いでいるのでした。

（5） 転がる円柱

やはり勇者の言葉は確かなようです。チェリアたちを乗せた船は、夕暮れ時までには、ちゃんと島近くの海域まで戻ってきていました。

ところが、島に近づくにつれて、船上にある二人の耳に奇妙な音が聞こえてきます。ガラゴロと、何か大きなものが転げ落ちてくるような音でした。

「アサジさん……何でしょうか、この嫌な音は」

二人の目には、昨夜そこから発った船着場が見えますが、この船着場はラノ・カウ大火山の麓に設けられています。そのため、海側からは山が障壁になって内陸部が見えないのですが、奇妙な音は、その見えない内陸部から聞こえるのです。



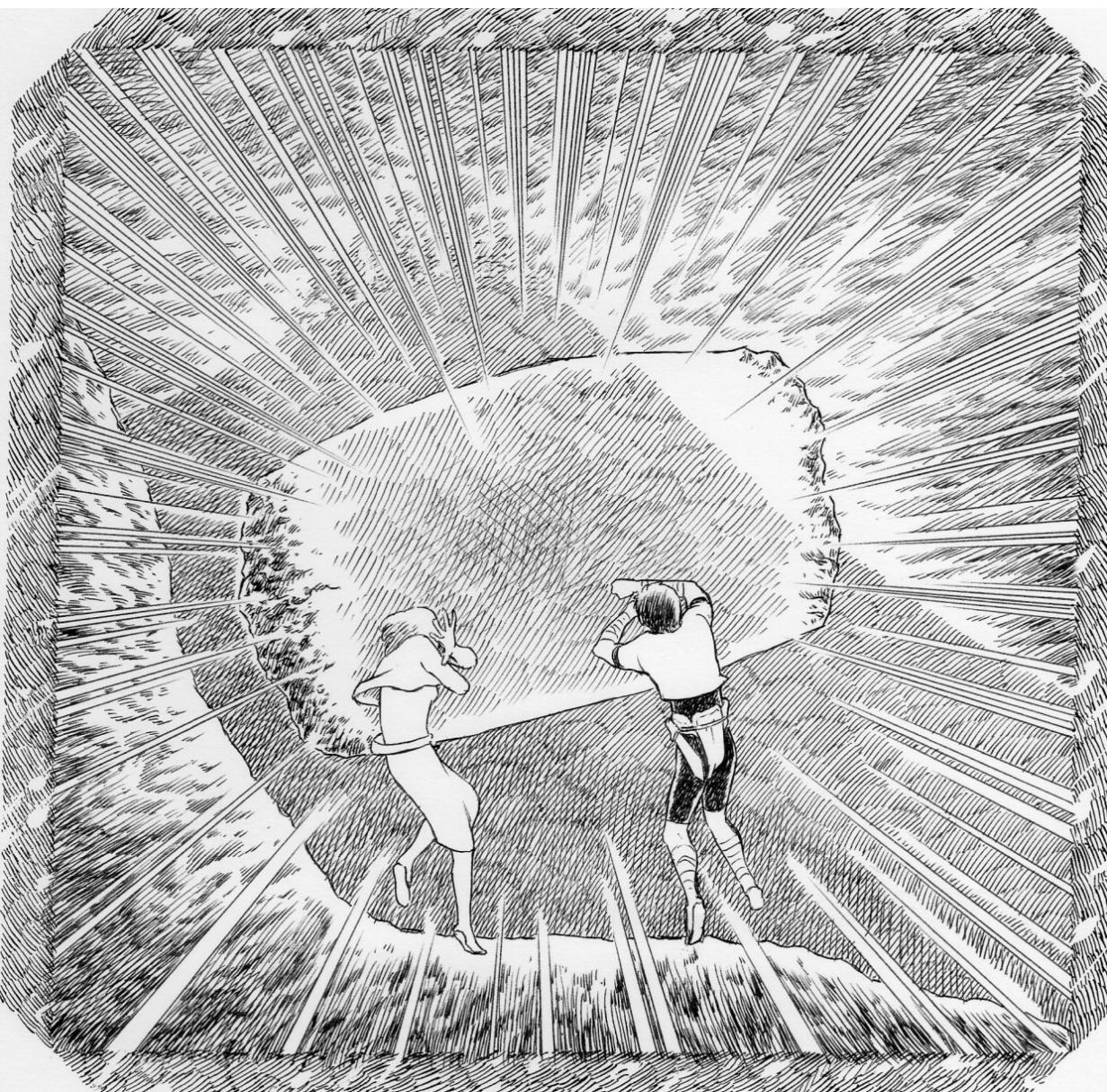
船が島につくと、アサジがつとめて冷静に言いました。

「急ぎましょう。島から離れていった鳥の群れといい、これは多分ただ事ではありません」

チェリアとアサジは、ラノ・カウ山の裾道を、弧を描くようにして走り、一刻も早く島の様子を見確かめようと急ぎました。

そして、内陸部の様子を見渡せるところまで二人が達すると、あの音が紛れもなく「ものが転げ落ちてくる音」だということが分かります。なぜなら、ラノ・カウ山という障壁であり、盾でもあったものを抜け出たとたん、二人の前に、まるで彼らに狙いを定めたかのように「何か」が転がり迫ってきたからです。

img004.jpg



「横に走って！」

と、アサジの指示と敏捷な動きによって、幸いその「何か」の急襲からは逃れられましたが、見れば、それは円柱状の、しかも大木二、三分分の太さを持った物体です。

このようなものを見たことのない二人は、その異常性にひどく狼狽しない訳にはいきませんでした。

「何だというのだ、これは……」

二人は、自分たちを急襲してきたものとは別の、あたりに既に転がっていた円柱に近づいて、それが何であるかを、しみじみ確かめようと思いました。

「臭い！」

謎の円柱に近寄ったとたん、チェリアはどうしてもそう叫ばなければなりませんでした。

彼女の言うとおり、その円柱は腐った死体のような悪臭を放っており、表面には焼けただれた皮膚のような質感があります。傷が化膿して血混じりになったのにも似て、見ているだけで吐きたくなくなるような、そんなおぞましさを呈しています。

ただし、このような特徴は円柱を裁断する両端のみに当てはまるものであり、醜い両端に挟まれた真ん中は、逆に悲しくなるほど無垢透明に輝いていました。そして、その透明な輝きが、チェリアをして、恐るべき言葉を吐かせることになったのです。

「このキレイな部分、見覚えがある。切り取られてるし、泥と腐ったような傷にまみれてるけど……これってアトラスさんの体、だわ」

毎日のようにアトラスたちと会っていたチェリアが、それを見間違える訳もありません。その円柱状のものは、はるか遠くにあるラノ・ララク大火山から転げ落ちてきたアトラスの体、見紛うことなき、切り取られた巨人の脛であったのです。

これほど凄惨なものを眼前にしているというのに、それを嘲笑うがごとく、雨季の最中とは思えないほど輝かしい夕陽が、わずかに開かれた雲の裂け目から、その赤々とした光を地上に差し込ませました。そして、その赤い光が島を照らし、そこに世にも奇怪な光景を浮かび上がらせます。

「これが全てアトラスさんたちの体だというの？」

見渡すと、辺り一面に円柱状のものが、それこそ幾百幾千と転がっているのが分かります。それら全てがアトラスたちの体だったとしたら、体のあちこちを切り取られた彼らの姿は、今どきようになっているというのでしょうか。

チェリアは、あまりにも常軌を逸した光景を前にして叫ぶべき声を失い、心臓が止まるような思いで、それらを眺めるしかありませんでした。しかし、そうした彼女に、アサジが震える声で話しかけます。

「アトラスが……チェリアさま、ラノ・ララク山のほうを見てください」

そう言われて目を向けると、そこには、残酷な、恐ろしい、耐えがたい、信じられない、苦しい、とにかく言葉では追いつかないほど驚愕的な景色がありました。

「やっぱりアトラスさんたちの体だったの……」

夕映えの中に、その異様なものは浮かび上がりました。

まず、いつもは微動だにしないアトラスたちが、今はものすごく動いているのです。巨人たちは、いかにも辛そうに体を振らせており、その様子は、彼らに何らかの責め苦が与えられていることを明示していました。遠目で見ても、その苦痛の激しさがありありと伝わってきます。

そして影。いつもであれば、光を浴びても影ができない、そうした透明な巨人たちの体が、今は、夕陽に照らされて、ところどころに黒々とした影を作っています。

しかし何よりも異様なのは、黒影を境にして、アトラスたちの肉体が失われていることです。彼らの肉体が、黒影を境にして完全に消失してしまっているのです。

肩に黒影があれば、そのアトラスには腕や手がありませんでしたし、膝に黒影があれば脛から下がなくなっていました。中には、胴や胸までもが虫食いのように失われているアトラスもあります。

そして、その失われた肉体こそが、夕陽に照らされながら、チェリアたちの足元に転がっているという訳なのです。チェリアたちの足元に転がっている円柱も、その切断面が、やはりアトラスたちのそれと同じような影を作っていました。

「何なの、これ……どういふことなの……」

チェリアがそう呟いた瞬間にも、轟音を鳴らしつつ、切断されたアトラスの体が転がってきます。ラノ・ラク山から落ちてきたものが、はるかラノ・カウ山の麓まで転がってきているのです。飛距離から考えて、落ちてきたというよりは、何者かに投げられているのかもしれませんが。

呆然としているチェリアに対し、アサジがその手を握って言いました。

「チェリアさま、何はともあれラノ・ラク山に向かうことです。病人たちにサンゴの卵を届けるだなんて、とても今は言っていられません。とにかく今はアトラスのところに、青いアトラスのところに行くことが先決です」

ラノ・ラク山に近づくにつれて、問題の光景は、しだいに明瞭なものとなって二人に迫ってきました。それは譬えようがないほど酸鼻をきわめた光景で、チェリアには、とても正視することが出来なかったほどです。

そして、山の中腹まで差しかかると、実際に、切れ切れのアトラスたちを触ることさえ出来ました。

「見てくださいアサジさん。変な生き物がいるんです」

チェリアがそう告げましたが、事実、アトラスたちの体には、その至るところに何か黒い生物がへばり付いていました。そして、その生物が、鋭い歯をむき出しにして巨人たちの体を裁断していたのです。

「あれは泥か？ ……私には泥にしか見えないが、まさか泥が動くはずは……」

アサジには信じがたく思えたでしょうが、しかし、それは間違いなく泥でした。動く泥、皆さんもご存じの「泥人形」です。

アトラスの透明な体は、その泥人形が張りついただけで、毒虫に刺されたかのように赤く腫れあがります。そして、その歯牙にかけられる瞬間には……あまりの痛みに、アトラスたちは、声にならない声をあげて悶絶していました。

そうした巨人たちの表情は、一様に、見ているほうが辛くなるほどの苦悶に満たされていましたが、彼らは、なぜかそれでも精一杯に背を伸ばそうとしています。

いえ、なぜか、ではなく、その理由は明らかでした。

「私たちが倒れれば、天の底はふたたび島を圧迫することになる。しかも、私たちという支えを失った天の底は、今度はなんの躊躇いもなしに地上に届いてしまうだろう。私たちの手は、その証となるほどの重みを感じている。だとしたら、私たちの体がそのまま島人たちの命なのだ。私たちが倒れれば島人たちも全て死ぬ」

このようにアトラスたちは思っていたのです。だから苦しくても背を伸ばそうとしていたのです。激痛に耐えながら、命をかけて。

しかし、そうやって痛みを耐えきったとしても、泥人形によって体そのものを奪われてしまうのですから救われません。この時点でも、体の崩壊によって倒れていくアトラスたちは多々おりましたし、その数は、これから増える一方と思われました。

「あ、倒れてしまう！」

とアサジの隣で、ひとりの巨人が命尽きようとしていました。

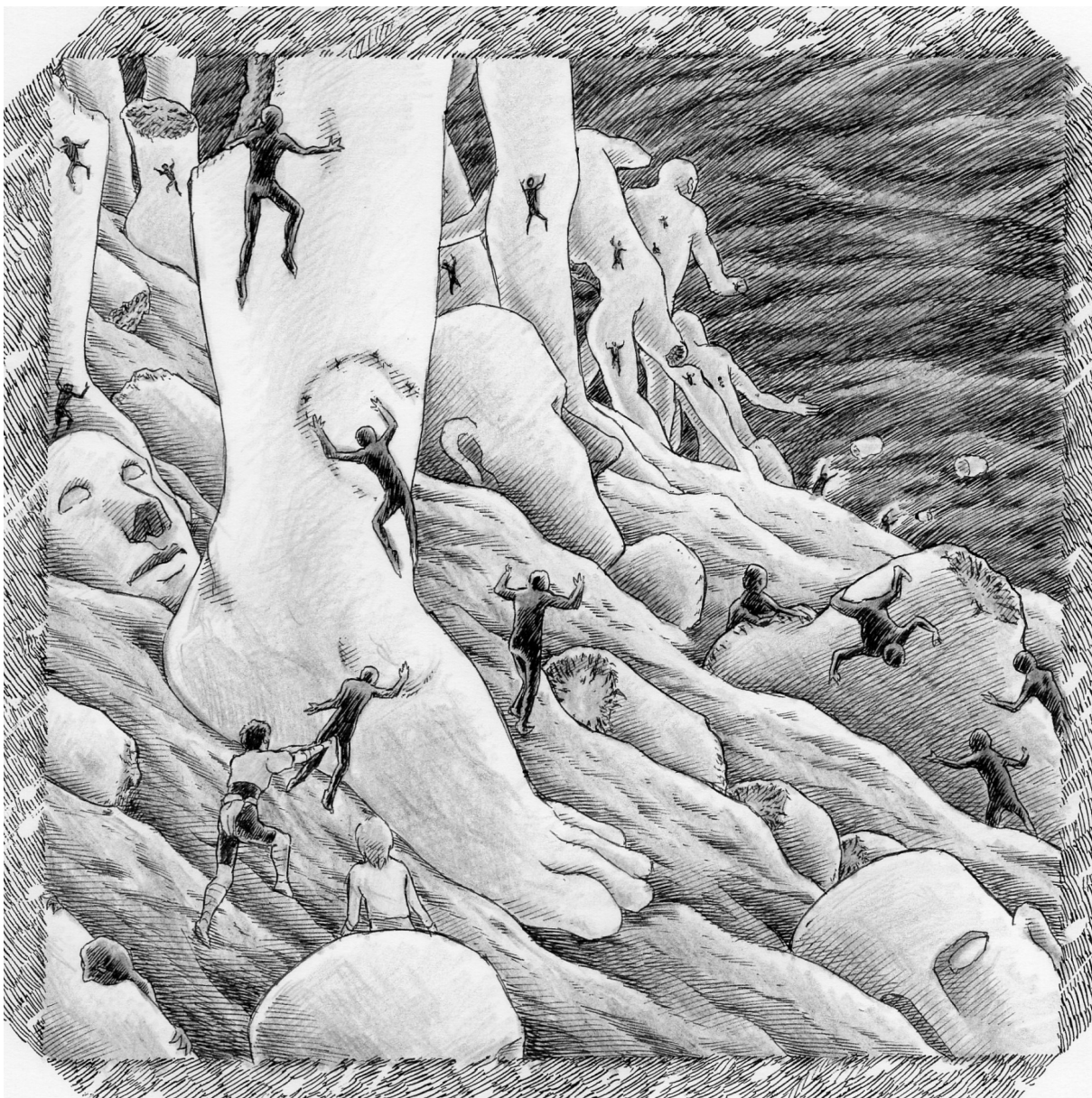
泥人形は、そのように倒壊したアトラスを見つけると、待ってましたとばかりに群がり、その鋭い歯牙によって体を分断しては、さも嬉しそうに、バラバラになった体を投げ捨てます。ほんとうに軽々と、遠くまで。

その様子だけを眺めると、いかにも泥人形たちが力持ちのように見えますが、そうやって投げるために、大した力が必要ななかったのかもしれない。なにしろ、もとが空で出来ているアトラスの体ですから、ごく軽いはずです。ともあれ、かつてチェリアたちを襲ったのは、こうして山裾に投げられたアトラスの体だった訳です。

ただし、泥人形たちは、なぜかアトラスの首だけは投げないで放置します。

そうして放置された首は、まさに「晒し首」そのものであり、そこに泥人形たちの非常に強い怨念が込められているようでした。その晒し首こそが、立ち込める異臭ともども、残酷な地獄絵図を描くための大きな一助となっていたからです。

img095.jpg



チェリアは、ことの異様さに気も狂わんばかりでしたが、短刀を握ったアサジは、勇者らしい思いきりをもって、近くのアトラスから泥人形を引きはがし、その腹に短刀を突き刺しました。

「こいつ、私には噛みつくとうとしない。いや、抵抗すらしないじゃないか……やはり泥だ。やけに人間らしい形をしているが、こんなにも柔らかくて冷たい。こんなものが動くこと自体おかしいが、こんな柔弱なものが、どうしてアトラスの体を傷つけられるのだ？」

刀を引き抜いたうえで、アサジが泥人形を見ていると、刀傷を容易に塞いだそいつは、わき目もふらずに再びアトラスに近づき、白アリよろしく、透明な体を容赦なくかじり始めました。

チェリアは、泥人形の様子を見て青ざめ、そうして青ざめると一緒に駆け出しました。

「アサジさん、急いで青いアトラスさんのところに行きましょう。考えたくありませんが、あの方もこのような事になっているかもしれません」

アサジが頷き、あっけなくチェリアに追いつくと、彼女の手を握って一目散に青いアトラスのもとへと向かいました。躡くことなく走る姿が、二人の息が合っていることを物語っていました。

「また落ちてきます。チェリアさま、気をつけてください！」

と、泥人形は、アトラスたちの腕にまでたかっているらしく、巫女も勇者も、落ちてくるアトラスの破片に、危うく頭を打ち砕かれそうになったりもしました。

そうして、やつのことで、青いアトラスの面前まで来ることが出来たのですが、山頂に近いこの辺りでは、まだ泥人形の数が比較的少ないらしく、青いアトラスの体に付いている程度で済んでいました。アサジは、力づくでその一体の泥人形を剥がし、それを遠くに放り投げました。巨人の体を切断できるような猛者なのに、人間相手だと妙にたわいないのは先ほどと一緒です。

青いアトラスは、足先から痛みが消えていくことで、そこで何かが起こったこと、そして、誰かがそこにいることに気づいたようでした。

そして、それがチェリアとアサジだと分かると、彼らに心配をかけまいというのか、平然とした顔で二人の前に掌を差ししました。そこへ乗るように促しているのでしょうか。

アトラスⅣ

著 者 正道

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
